海猫０３

プロローグ

西暦２０ＸＸ年、ついに第二次関東大震災が発生！
被害は予想を上回る規模で広がり、首都圏は壊滅。都市機能は完全に麻痺状態となった。東京住民の半数近くが地方へ一時疎開する中、兇悪犯罪、破壊活動、私兵集団の跋扈等、治安の悪化はみるみるうちに進行した。
事態を深刻に受けとめた政府は突如、治安担当行政機関『特務庁』の新設を発表、非常令を宣言した。
特務庁の実働部隊、治安局は、しだいに諜報活動や実力行使といった一般警察以上の権限を獲得していき、強大な権力を有した軍事秘密警察組織へと変貌を遂げていく。
人々は彼らをその標章から『海猫』と呼び反発したが、いつしかその声も弾圧と監視の目を恐れて、沈黙を余儀なくされていったのである。……

ゴキブリ

月夜の渋谷公園通りをステルス戦闘機の如き黒檀色ボ

ディの装甲車が徘徊している。
　六輪タイプのそれは巨大だが、エレクトロニクスのエンジンを装備しているらしく、滑るように音もない。まるで敏捷で軽快な洗練されたアフリカの中距離ランナーを思わせるような足回りだ。
　市民、とくに若者から「ゴキブリ」の名で呼ばれ、敵意と憎悪の対象となっている特務庁管轄の装甲車は、信号を無視して右折すると、かつての賑わいが嘘のような無人の公園通りを車体前部にある赤色灯を明滅させながら、しだいにスピードをあげて走り抜けていった。
　「やっぱり誰もいませんでしたね」
　暗視用の車外カメラが輝度のきついモニター画面に映しだす、いまだ復興ならない街並みを注意深く観察しながら吉崎京太郎がつぶやいた。
　「人っこ一人いない……」
　カメラは自動的にアングルが変更されていくようにセットされているらしく、つぎつぎに前後左右の状況を見せてくれる。
　「当たり前だろ。じゃなかったら、この間の一斉摘発の意味がなくなっちまう。夜間外出自粛令の徹底は喜ばしいことじゃないの、吉崎くん」
　皮肉っぽく、御坊課長は部下の肉づきのいい肩を叩いた。吉崎は苦笑したが、彼はやはり不満であった。鼠がいなければ猫の生きがいも半減する。どこかにいきのい

い鼠、それも牝鼠がそのキュートな髭面をのぞかせていてくれないかと、未練がましく画面に視線を注ぐのだ。
　ここは操縦室とは隔離された装甲車後部のトランクの中である。トランクといってもかなりの空間があって、小型バスの車内くらいはあるだろう。そこに、最新テクノロジーの粋を集めたあらゆる機材が積みこまれていた。壁面いっぱいにボルトじめされたラックに整理された機械群は、無数の色彩の発光体を点灯させながらあらゆるセンサーからインプットされてくる外部情報を解析し、照合し、比較し、推論し、判断して、回答をアウトプットする。特務庁本部地下にあるホストコンピューターの無限の計算能力の力も借りながら、それらが下す結論と指示はほとんどの場合、有効で錯誤がない。少なくとも今ここにいる二人の女子教育課の局員の頭脳より明晰であるのは確実だ。唯一、二人が勝っているものといえば、性欲くらいのものであろうか。残念なことに――特務庁の本来の職務にとってみても、東京のすべての女性族にとってみても――緊急に必要な国土の復興予算を大幅に削ってまで購入されたこのハイテクゴキブリ車の行動を統御しているのは、まさにその性欲にほかならないのだった。
　御坊が操縦室へ通ずるインターコムに向って命令を発した。
　「代田方面へ回してくれ」

吉崎がその声にふりかえった。
「課長！」
声は華やぎ、満面は笑みに溢れかえる。
「訪問査察、してみっか。彩ちゃんのアパートをさ」
「さすが課長！　課長の部下思いはヒューマニズムの極致ですよ！」
「ヒヒヒ。くるしゅうない、くるしゅうない。部下の笑顔こそ、上司にとって何にも勝る喜びに違いないんだからさ」
師弟はうなずきあいながらこの夜の巡回における最高のディナーを心に思って股間を熱くするのである。
装甲車はチラホラ出現する残業帰りのビジネスマンを乗せたタクシーを恫喝しながら最近やっと再建された環七の立体交差を走り、ジャンクションを旋回して一般道にすべりこんだ。
この辺りの居住区はまだほとんど手がつけられていないため、あるのはコンクリートの残骸とプレハブの簡易住居ばかりである。そこを無機質の高性能ハイテク装甲車が走り抜けていく様は、昨今の日本のイビツな状況を端的に現しているといってよかった。金は、力のある者の元へと流れるのだ。予算は力のある官庁が独占するのである。
「彩ちゃんの顔を拝むのは久しぶりだな」
はしゃぎ気味の吉崎。二人ともスポーティな紺色の制

服を着ていたが、吉崎は車内が暑いと上着を脱いでメッシュのＴシャツ姿になっている。冷房はきいているが、彼は肥満体質なので暑がりなのだ。
　御坊課長はコーヒーの入ったマグカップを手にしてモニターを指さした。マグカップには海猫のキャラクター化されたロゴが入っている。子供への浸透は重要な戦略のひとつである。
　「出してみなさいよ。彼女のデータを」
　「そうしましょ」
　吉崎はキーボードを叩いて次々にデータファイルを開けていく。最後に出てきたのは東京＞学生＞女子＞危険度イエローのディレクトリ。
　『菅野　彩　スガノ　アヤ』が検索され、格納されてある全情報がモニターに表示された。
　『菅野彩――年齢十九歳　Ｋ大学法学部二回生　身長１６８センチ　体重５１キロ　胸回り８４センチ　胴回り６２センチ　腰回り８５センチ――』
　「おやーん？」と吉崎がモニターに顔を近づけた。
　「どうしたの？」苦いコーヒーを飲みながら、御坊は訊ねた。
　「先月よりおっぱいがふくらんだようですよ」
　吉崎はキーをふたつみっつ叩いて更新される前のデータを呼び出した。その時点でのバストは８３センチであった。

「発育盛りだからねえ」
「どうですかね、それは」
吉崎はさきほどまでの喜色満面ぶりにやや水がさされたような表情である。
「このご時勢、一人暮らしの学生が太るような食料なんか、ないでしょう。ウエストもケツもそのまんまですからね」
「なるほど、それもそうだな。してみると……へへへ、恋人でもできたってわけか」
ムッと口を尖らせる吉崎。再びキーボードをカチャカチャ鳴らした。
『検索対象者との接触した人間の表示――最近、一週間に範囲を限定しますか？　ｙ／ｎ？』
吉崎はｙキーを打ちこむ。
『接触度を次から選択してください。電話・対面会話・室内遭遇ｅｔｃ……』
すべてを要求する。暫時、検索中の沈黙がつづく。
「学生が一週間に会う人間の数ってあんがい多いもんだな」
「そうですね。なんたって大教室の学生すべてが対象になりますからね」
検索が終了し、表示が始まる。五十音順に氏名がざっと並んだ。もちろん一画面には収まらず、何ページにもなった。

　検索抽出の命令文を打ちこむ。『頻度順にソートせよ』
　先頭に来た名前を、吉崎は睨みつけた。男の名前である。
　『佐伯隆一　二十二歳……』
　「こいつが恋人かい？」
　吉崎は無言のままかすかにうなずく。
　「ほほう、彼氏のアパートにも何度も通ってるようじゃないの。おっぱいが巨きくなるわけだよな。たっぷりモミモミされてるんだ、彩ちゃんは」
　「……どうやら、こいつにオルグされかかってるようです。もともとがイエローですからね。遠からずレッドになるんでしょう」
　御坊の目が多少、鋭くなる。
　「この男、『コマンド』の一味なのか？」
　「幹部候補生ってところですかね。指導力があって頭も切れる。それに……美形です」
　「お似合いのカップルの誕生だ」
　吉崎は頬をひきつらせながら御坊の顔を睨んだ。この上司、優しいかと思えば、突如、残酷なほど冷たくなる。精神構造のどこかに欠陥があるんじゃないだろうか。もっとも、吉崎だって人のことは言えないのだが。
　吉崎はモニターに菅野彩の顔写真を表示させた。美しいセミロングの黒髪に縁どられた細面の美貌がカラー画

像で映しだされる。じゅうぶんな解像度をもっているため、肌の質感まで忠実に表現されている。彼女はやや横向き加減で切れ長の魅力的な瞳を傍らの人間へ向けているようだった。
　冴えた額は理知的な彼女の性格を示している。まったく化粧はしていない。なのに頬は艶やかで若さに輝き、唇は朱色に濡れている。聡明そうな柳眉。鼻筋が通り、尖り気味の鼻。口はやや大きめか。いずれも整い、二十歳前とは思えない落ち着きとゾクッとするような大人っぽい美貌を演出していた。
　「いや、吉崎、お前が執着するのもよーく理解できる。これは上玉だ。逸品だ。丸得だ。特務庁女子教育課としては、国家の宝として管理監督せねばならない。つまらぬ虫がたからないようにな」
　「ええ、そう思いますよ。とくに彩ちゃんは家族が震災で全滅して天涯孤独の身の上ですからね。我々が守ってやらないといけないんです」
　「そうそう。おっぱいをモミモミされたからってバージンを失っているかどうかはまだわからない。頭のいい娘だし、あんがい一線は守っているかもしれん」
　アイ・ホープ・ソー――吉崎は胸の内でつぶやきながら画面の彩の美貌に見惚れつづけた。
　ゴキブリは狭い路地を器用に縫っていく。何といっても六輪すべてが独立駆動で、その場で三百六十度回転さ

え造作なくやってのけるのだ。巨大な図体などちっともハンディにはならない。
　二階建のプレハブが固まって並んでいる地区にでると、スピードが緩み、やがて停止した。
　「おい、彼女の部屋、明かりがついてないぞ。もう寝たのか？」
　「まさか。まだ九時半ですよ。いくら電力規制が徹底してるからって、あれは十一時からだし……」
　「と、すると、おい、ひょっとすると――」
　二人は顔を見合わせた。どちらからともなく、どちらも期待していた言葉が口に出てきた。
　「まだ帰宅していないんだ！」
　これは天の恵みと言わねばならない。海猫の特権を考えれば、彼女が在宅しており、何らやましさのない生活を営んでいたとしても、令状なしで乱入し、好き放題に蹂躙することはできる。しかしそれはできれば避けたい。少しでも海猫のアラを探して司法捜査の主導権を奪回せんと狙っている一般警察ならびに検察当局に利用されないとも限らないからだ。なに、あんな腰抜けどもに大した真似はできないのだが、ことが騒がしくなると、特務庁内での女子教育課の立場が危うくなりかねない。ただでさえ泡沫部門として軽んじられているのである。無益ないざこざはないほうがいいに決まっている。
　しかし、未成年である菅野彩が外出自粛令に背いてこ

の時間まで帰宅していないとすれば、何にも気兼ねはいらなくなるわけだ。大っぴらに捕獲・詮議ができるのである。
　「吉崎、ベッドを用意しとけ。たっぷり時間をかけて吟味してやろう。精液検出装置も忘れるな。ちゃんと手入れはしてあるんだろうな？」
　「そりゃ、もちろんですとも。俺のザーメンのついた二ヵ月前のパンツ、ちゃんと血液型やＤＮＡを割り出してますよ」
　「きたねえなあ、お前は！　洗濯くらいしろよな」
　吉崎は折り畳み式の簡易ベッドをセッテングした。ここへ捕獲してきた女を寝かせ、厳しく吟味するのである。仔細によってはこのまま本部へ直行し、婦女子教育房に放りこむのも可能だ。
　吉崎はベッドの四隅にある拘束ベルトの強度を試しながら、上半身裸にされてうつぶせに寝かされた――その体勢がここでの吟味の手順である――菅野彩の姿を思い浮べて目尻を下げている。
　「おおっ！」御坊が歓声をあげた。
　慌ててモニターのところに駆けよる。街灯もない、暗い夜道をスラリとした若い女性が小走りにこちらへ向ってくる。ブルーのジーンズにチェックの半袖シャツ。うえにピンクの薄いカーディガンを羽織った軽装だ。望遠で捉えると、やや汗ばんだその顔が確認できた。

「彩ちゃんだぜ。少し慌ててるな」
「課長、こっちも慌てないと。部屋に入ったら手こずりますよ」
吉崎は制服に袖を通し、装甲車の胴部に面している自動扉を開けた。電気銃をもち、暗視ゴーグルつきのヘルメットをかぶる。御坊も同様の装備をして、飛び出していった吉崎の後を追った。重々しい軍靴の響きが冷たく街路に反響している。
焦土化を逃れた貴重な街路樹に隠れながら、吉崎は女と、女のプレハブの間を断つように躍り出た。御坊は彼女の背後にまわりこみ、退路を阻むべく挟み撃ちだ。
仰々しい風体の男が突如、現れたので、彩はギクリとその場に立ち尽くした。ゴーグルのなかの不鮮明な液晶画面に美人女子大生のこわばった表情が揺れている。
彼女は自分の背後に迫ってきた高い靴音に気がつき、ふりかえった。同様の重装備の人間を認める。ここに至っては自分の置かれた立場を悟らねばならなかった。この男たち――たぶん男だろう――が海猫の一員であり、自分が彼らの陵虐を正当化するような法規違反を犯している現行犯である状況を。いや、もちろん、そんな法規などは認めるわけにはいかなかったが、少なくとも彼らの論理ではそうなるし、世間も消極的ながら承認を与えているご時勢なのだ。彩は真珠のような奥歯を噛みしめる。学生仲間から耳にタコができるくらい聴かされてい

る海猫の噂を反芻した。それだけで、身体の隅々まで汚辱にまみれた気分になる。
　だが、彩の心に恐怖心ばかりがあるわけではない。毅然として反駁し、決して矜りを失わず、正論を通し、闘いぬこうという決意も同時に沸き起こっていた。そうでなくては『コマンド』入りをきめ、日本を暗黒の雲で覆う『海猫体制』の打倒運動に青春を捧げようとしている自分の理想に反することになるのだ。そして、彼との誓いにも裏切る結果になる……。恋人である佐伯隆一の面影を脳裏に浮かべると、彩は落ち着きを取り戻した。平素の怜悧さが蘇り、青ざめていたその肉薄の頬にも血色が戻ってきた。
　彩は怯えを排した視線を前方のゴーグル野郎に投げつけ、ふんと侮蔑の色をあらわにすると、何事もなかったかのようにゆっくりと歩き始め、あっさり彼の横をすりぬけた。
　唖然として見送る吉崎は彩の圧倒的な超然とした美しさに位負けした感じである。
　御坊が無線でわめきたてる。
　「何やってんだよ。吉崎、目を覚ませ。とっとと捕まえないと、今夜はお預けにするぞ。あの男にバージン、とられてもいいのかよ、お前は！」
　バージン……あの男……ふと、吉崎は我に返り、彩の背に外部マイクで呼び掛けた。

「とまれ！　未成年者遊興目的外出自粛令違反の現行犯として捕獲する。神妙にお縄につくんだ！」
　彩はその声にふりむいた。
「遊興目的の外出ではないわ。大学の図書館で勉強会をしていただけよ」
　りんとした透き通るような彼女の声が心地よく響く。海猫に夜、遭遇してこれほどしっかりした態度をとる女はそうはいない。ますます彼女の株はあがった。
「それが真実かどうか、吟味するから一緒にくるんだ」
「じゃあ、少なくとも現行犯じゃないわけね。法令の濫用は慎むべきですよ」
　そういえばこの女子大生は法学部だった。挙げ足をとられて吉崎はカッと頭に血を昇らせた。
「うるせぇんだよ。さっさと来ねえか！」
　電気銃を彼女の胸に向ける。しかし彩は取り乱すふうもなく、吉崎に視線を置いたまま腕を組む。チェックのシャツのボタンがひとつだけ外れていて、首の筋肉のつけ根がのぞいている。たったそれだけの露出度なのに、妙になまめかしく感じられるのは惚れた弱みか。昇せあがっている分、こういう人を小馬鹿にした態度は許せない。恋人のあの男に見せているのであろう、尊敬と愛情に満ちた視線とは似ても似つかぬ冷たい視線が己れに向けられているのに、吉崎は耐えられなたかった。

（力を見せつけてやるっ）
この時代における男の価値とは何か、思い知らせてやる。
彩の足元に向けて電気銃が発射された。青いスパークが暗闇を切り裂き、ゴーグルの液晶画面が白熱化する。
「あっ――」
彩の小さな悲鳴が響いた。と同時に彼女の華奢な身体は後に飛ばされ、仰向けに引っ繰り返った。ジーンズに包まれた二肢が跳ね上がってＶ字を作っている。
吉崎を押し退けるように御坊が彼女に駆けよる。
「バカ。そんなに大きなレベルで撃つ奴があるか！」
その言葉が吉崎を昂奮から覚醒させた。知らぬ間に銃のパワーを示すメモリが致死量寸前のレベルまであがっていた。慌てて御坊の後を追う。
「大丈夫だ。直接、身体には当っていない。放電の衝撃波で失神しているだけだ」
近くに落雷があったのと同じ状況である。吉崎はゴーグルを外し、ペンシルライトで彩の顔を照らす。血の気を失った美貌が黒髪をほつれさせたままのけぞっている。朱唇が半開きになり、白い歯並びが見える。
「よし。今のうちに装甲車に運びこんじまおう」
御坊が右腕を、吉崎が左腕を、それぞれ両側から抱えこむようにして起こすと、そのままズルズルと引きずった。頭ががっくりと垂れて頭髪のなかに表情が隠れるの

だが、その屈服した姿が吉崎にはたまらない被虐美だった。加えて、スニーカーの底を空に向け、甲のほうを地面に摩擦している足や、反っている腰部と、そのためにひときわプリプリと盛りあがっているヒップの丸みが愛しささえこみあげさせるのである。
（女はこういう弱々しい姿こそ、様になるってもんだぜ、彩ちゃんよ）
装甲車に連れこみ、扉を閉めた。これでもう何にも気兼ねする必要はない。社会とは隔絶された治外法権の空間なのだ。
正体のないグニャグニャの彼女をベッドに寝かせる。
二人はヤレヤレとしばしそれに見惚れ、それからヘルメットを脱ぎ、銃を置いた。グローブを外し、吉崎はまた制服の上着を脱いでシャツ姿に戻る。
「まだ脱がさなくともいいでしょうね」と吉崎。
「ああ。自分の手で裸になってもらわんとな。それがデュー・プロセスってやつさ」
御坊はやや呼吸を乱している。若い吉崎のように無尽の体力があるわけではない。女とはいえ、人一人引っ張ってくるのはけっこう消耗するものなのだ。彼は煙草を取り出し、火をつけた。女子大生の寝顔を見ながら煙を気持ちよさげに吐き出した。
彩の長い睫毛がスッと動いた。瞬く瞼の中のしっとりと濡れている眼球が映像を求めるようにふらついてい

る。まずここが気を失う前に自分がいたアパートの前の見慣れた空き地でない事実を悟ったようだ。そして気を失った時点を思い出す。つづいて気を失った理由もフラッシュバックする。彼女の身体に緊張が走った。明確に、二人の海猫の局員の姿を認識した。
　彩は跳ねるようにベッドのうえに起き上がった。顔をぐるりとまわし、どうやらただならぬ場所に拉致されてきたのだと考えた。街中を我がもの顔に巡回しているあのゴキブリの体内に違いない。
　改めて二人の卑劣なファシストを睨みつけた。クローンのように薄気味悪い微笑をともども浮かべている男たち。
　「……こんな横暴は許されないのよ……」
　気丈にも彩は彼らの非道を真っ先に糾弾するのだった。
　「あたりかまわず武器を使用するなんて、どういうつもりなのっ」
　その眦を先鋭的に吊り上げた面相のなんと素敵なことよ。凄絶な美がなんら無駄もなく張りつめている。とくに切れ長の三白眼は胴震いがくるほど魅惑的だ。
　「容疑者が逃走を企てた場合、武器の使用はもちろん許可されているんだよ」
　御坊がいたぶるように低く静かな口調で反論した。
　「私、逃げてなんていないわっ」彩は彼へ射るように

視線を飛ばした。
　「フフフ。まあ、そんなにとんがらないで。落ち着きなさい」
　「誤魔化さないで頂戴！　不当な扱いを受けて落ち着いていられるわけがないでしょう――」
　彼女の言葉が終わる前に吉崎が巨体をむっくりと立ちあがらせた。明るいところで見ると、いっそうその重量感が威圧的である。それにこの男だけ制服を脱いでいるのはなぜだろう。年上の男とは役割が違うということか。それはいったいどんな役割？
　彩は吉崎を見上げながら、慄えそうになる自分を叱咤した。
　「女子大生のくせに口の聞き方がなってないんじゃないか。目上の人間に対する言葉遣いじゃないだろ。あン？」
　「……私を、どうして大学生と知ってるのよ」
　疑惑がカァーッと募ってくる。これは行き掛かりの検問・捜査ではなかったのか。菅野彩を特定して最初から計画的に狙いをつけていたのだ。なぜ？
　彩の心に再び佐伯隆一の顔が浮かび上がる。間違いない。彼への詮議の一環だ。隆一も言っていた。身辺に尾行や盗聴の影が見え隠れしはじめていると。ならば、余計、気を引き締めていなければなるまい。自分ばかりか彼にまで厄難が及ぶのはなんとしても避けねばならなかっ

た。
　「何でも知ってるんだよ」と吉崎は言った。「世間のすべてを一部始終、チェックしているんだ。とくにお前のような不平分子の卵にはな」
　「不平分子？　なんの話だか、さっぱりだわ」
　彩はプイと横を向く。
　「しかしまあ、とにかくだ――」と御坊が灰皿に煙草を押しつけながらつづける。「この時間に一人歩きしていたのは事実なんだから。こっちとしても所定の吟味はしなくちゃならん。仕事だからねえ」
　そして御坊は吉崎にお茶を入れるようにと指示した。
　「ひと息つけば、落ち着いて協力的になってくれるだろう。頭のよさそうなお嬢さんだし」
　「いらないわ。変な薬が入っていないとも限らない」
　「馬鹿野郎っ。課長の暖かい心がわからんのか。根性の根まで腐ってるな、お前」
　「お前なんて言わないで頂戴。どうせ、名前だってもう知っているんでしょう」
　彩は冷笑を浮かべ、吉崎に挑戦するようにすっと立ちあがると、睨みつけ、両手を大きく左右へ広げるのだ。
　「さあ、どこでもいいから調べてください。おっぱいとかお尻とか、跨ぐらとか、集中して吟味するつもりなんでしょう。いいわよ、さっさとおやんなさいよ」
　おっ、とたじろぐ吉崎。勇ましい剣幕に、ではなく、

つい目と鼻の先に迫ってきた彩のなまなましい素顔の美しさにだ。そしてこの匂い……。たちこめる素肌の瑞々しい芳香。黒髪の情感的な香り。香水もつけておらず化粧もなく、きっと朝シャンもしていないであろう、まったくの素の状態なのに、やはり若さのなせるわざなのだろうか。たまらない女のフェロモンである。

「おやーん？」

突然、吉崎は小腰を屈めて、彩の顔を覗きこんだ。

「な、何よ……」

「お前、こっちの頬っぺたにニキビがあるぞ」

吉崎は彼女の右頬を指さした。ほんの小さな赤い発疹が頬の真ん中に突起している。

「……だから、だからなんだって言うのよ……」

男の目を遮るように頬に手を当てて隠し、卑劣な撹乱作戦に歯噛みする彩。

「一週間前まではなかったはずだがな」コンピュータにファイルしてある画像にはどんなに拡大してもニキビなどなかった。あの写真は先週の前半に撮影されたものだ。

「思われニキビか。それともアレのやりすぎで肌が荒れたか。彼氏はちゃんと愛してくれてんのか。何度も何度も挑みかかってくるんじゃないのか。駄目だぞ。欲望に任せてると、せっかくの可愛い顔が淫売みたいになってくるんだから」

「……」
　吉崎の言葉には幾つもの恫喝が隠されている。この男は変質者だ。ニキビの存在まで観察しているとは常軌を逸している。恋人の有無をほのめかすのは彩の二十四時間の行動をリサーチしているからに他ならない。なんだか、単なる海猫によるコマンド狩りではないような気がしてきた。もっとどす黒い、イビツな欲望の渦が眼前にあるような気分である。
　「な、わかるだろう。女ってのはな。肌をちょっと吟味しただけでもどういう生活をしているか、すぐに見えてくるんだ。だから、ちゃんと素直に言うことを聞いて、俺たちにすべてを曝け出せ。そうすりゃ、優良婦女子になるための処方箋を作ってやるからよ。なーんの心配もないんだぞ。みんなお前のためなんだからな」
　吉崎は彼女の両肩に手を置き、ポンポンと叩いた。そのまま繊細な女らしい撫で肩をつかんで力をこめ、ベッドに腰を落とさせた。華々しく反駁して立ちあがった彩だったが、海千山千の女子教育課の局員にいつのまにかあしらわれ、御されてしまった感である。
　「さ、お嬢さん。上半身裸になって、ベッドに寝てもらいましょうかね」
　満を持していたように御坊ものっそりと立ちあがった。二人の大男に傍らに立たれ、見下ろされると、自分の無力さがひしひしと感じられる。冷汗が首筋に流れ

る。
　「……ヌードショーでもしろって言うの……」
　彩の声はかすれていた。さっきの勇ましさはトーンダウンしている。
　鉄火の女子大生をチビらせたことに、二人は顔を見合わせてニンマリとする。この瞬間こそが、海猫に入ってよかったと感激する言わば真骨頂なのだ。これがなかったら、嫌われ役は三日で辞めているかもしれない。
　「何もおっぱいを見せろといってるわけじゃない。俯せでかまわんよ。辱めるのが目的じゃないからね」
　「……愚劣だわ。どっちにしたって辱めじゃない」
　「もっと尊敬語を使わんか。この方は課長なんだぞ」
　吉崎の巨大な手が彩の頭を小突く。
　「触らないでっ。いやらしい」
　「愚図愚図してると――」御坊がこれ見よがしに深呼吸する。「我々が力づくで脱がせることになってしまう。つまらんでしょう。痛い目をみるなんて」
　脅しではない。彼らならやるだろう、と彩は思った。落ち着け、落ち着け、と自分に言い聞かせる。こんな男どもは人間じゃない。ただの野獣だ。動物に肌を見られたって何が恥辱なものか。理屈はそうだ。だが、やはり落ち着くなどできない。頭が燃えるように熱い。恋人にしか見せた経験のない肌を変質者たちの淫靡な視線に晒す汚辱感はとうてい受忍の限度を超えている。しかし無

理矢理、脱がされるのはもっと鳥肌がたつ。彼らの手がべたべたと肌に触れてくるなんて、思っただけで気絶しそうだった。
「……わかったわ。あっち、向いていて頂戴」
二人はゲラゲラと笑いだした。
「お嬢さん、全然、自分の立場がわかっていないようだね。いいから、さっさと脱ぎなさい」
御坊の目が冷酷になった。どんなに些細な要求さえ受けつけるつもりはないといった表情である。
「――」彩は青ざめながらカーディガンの胸もとをつかんだ。細くて長い美しい指がかすかに震えている。唇を噛むように歯軋りしながら、ピンクのカーディガンを肩から脱いでいく。下は半袖のシャツなので、上腕の半分くらいのところから、ほっそりとした二の腕が剥き出しである。その腕から類推しても、彼女の裸身は輝くような玉の肌に包まれているに違いないと思われた。肌理の細かい肌だが、憤怒と屈辱に毛穴を浮き立たせている。
さて、愛らしいカーディガンはすぐさま吉崎が取り上げた。
「匂いを嗅いで、オナニーでもするつもり？」
屈辱感に押しつぶされそうな胸から、必死に言葉を絞りだし、精一杯の皮肉を言う。
「してほしいんだったら、やってやろうか？」

　ケケケと口元を歪めて嗤う顔ときたら、まるで醜怪なマントヒヒに似ている。カーディガンはとくに検査もされずに篭へ放りこまれた。
　彩はシャツのボタンに指をかけながら、自分は悪い夢を見ているのではないかと本気で考えていた。ただ公道を歩いていただけなのに、なぜ裸にまでならねばならないのか。これでは太平洋戦争中の特高時代よりも悪いではないか。
　（打倒すべき社会なのだ）と、彩はそれまでの決意をいっそう強固にする。絶対にこのままではすまさない。（このオトシマエは必ずやつけてやるから）
　ひとつ、ふたつ、と、胸もとが肌けていく。今や、青ざめていた容貌に紅が戻り、あらわになりつつある首筋から胸もとにかけての雪白の肌も桃色に染まっていった。
　そのもう少し下、ふっくらと盛り上がりを見せはじめている胸部にベージュの下着のＶゾーンがくっきり露呈しはじめると、見下ろしている二人の鼻息がますます耳に響いてくるのだった。

　　厳しい追及

　彩はスリップをつける習慣がなかったので、ブラジャ

ーだけの上半身を男たちに晒すハメになった。シャツは御坊に奪い取られた。女体のぬくもりや、曲線の丸みが残っているそれを女子教育課の課長は毛むくじゃらの短い指で撫でまわしている。
　それにしても、現出した菅野彩のまばゆいばかりの上半身の美しさはどうだろう。均整の取れた骨格に、過不足ない肉づき。艶やかな黒髪が垂れかかる優美な肩から腕の細さへつらなる華奢なライン。ベージュのショルダーストラップに区切られた胸もとのすべらかさ。そして着衣のうえからは想像できないほどのボリュームのある双乳……。ブラのカップの縫い目がはち切れそうなくらいの若々しい弾力感。深い谷間のつくる翳り。せめぎあう肉丘の裾の露出。これで八十四センチとは信じられない。九十近くはあるような気がする。データを抽出した原簿が間違っていたのではなかろうか。
　視線が集中するむっちりとした双乳に、彩は片腕をまわし、もう片方で臍窩を隠した。その臍窩は綺麗な縦長をしていた。青いジーンズのベルトを巻いた腰まわりが腹の肉に食いこんでいる感じがセクシーだった。
　「なかなかいい身体だよ。トランジスタ・ボディってやつじゃないか」
　御坊は涎がでそうになるのをこらえながら、凝視している。さしもの彩も耐えきれずに顔をうなだれさせているので、見下ろしている御坊の角度からは汗ばんで光っ

ている直線的な鼻筋と尖った鼻頭だけがのぞけるだけだが、チリチリするような勝利感と嗜虐感に酔わずにいられなかった。
　一方、吉崎のほうは重症といえる。昂奮に喉が渇いてかすかな音声すら発せもできない。
　（美しい、美しい……）うなされるように心で同じ言葉を念じるだけだった。美しいだけでなく、たとえば乳ぶさの巨きなども、いかにも大きな男の手のひらで包みこんでモミモミするのに理想的なサイズなのだ。頬ずりしたくなるような乳白色の肌も、強くつよく抱き締めたい衝動に駆られる細身の身体つきも、どれをとっても男に愛されるために造り上げられた見事な芸術品に違いなかった。その男が自分でない現実は吉崎にとって致命的で泣きだしたいほど苛酷なものであった。
　「おらっ、なに休んでんだ。ブラジャーも取るんだよ」
　職務に戻った吉崎は憎々しげに靴の先でベッドの足を蹴る。振動に彩は首をあげ、猛烈な憎悪に充血した瞳を吉崎に向けるのだった。呼吸の激しさが、彼女の感情を物語っている。鉄火の性格には耐えがたい成り行きであろう。きつく結ばれた唇がふとゆるみそうになり、エキゾチックなその口から苛烈な抗議の言葉が今にも噴出しそうになった。が、彼女には衝動的な若いばかりの行動を抑制する知性が備わっている。グッと血を呑みこむよ

うな気分で感情を押さえ、手を後にまわして背中の留め金を外した。バストの位置が微妙に変化した。そのかすかな蠢きに生々しい女体の色香を感じるとともに、彼女の乳ぶさの力のみなぎりの充実ぶりに感心するしかない。ほとんど、ブラジャーなど必要のないくらい、フィジカルが強いのだろう。

　彩は視線を床に落とすとブルブル慄える上品な肩先を手で押さえ、バストを吊っているストラップをずらしはじめた。

　ゴクリと生唾を咽喉に下す男たちの露骨な好色の音に美人女子大生は脂汗を額に滲ませて嫌悪する。黒髪からはみだしている形のいい耳が真っ赤に染まっている。指先がストラップをつまみ、ミリ刻みで腕へとおろしはじめたが、途中で押さえきれない感情が爆発したように、乱暴に、両手でブラジャーを毟り取った。そしてストラップの千切れた残骸を目を丸くしている吉崎の顔に投げつけた。

　「満足した？　変態のファシスト！」

　吉崎は受け取った柔らかいブラを握り締めつつ、丸出しの乳ぶさに圧倒された。まさに理想的な吊り鐘型の肉の房がたわわに実っていた。網膜が刺激される白さ。そして乳頭部の可憐な桃色の輪と突起……。彼女は抗議の手段として、それを隠そうとはしなかった。いいだろう。ならば宝珠のような輝きを見せつける乳肌に透けて

いる緑色の静脈の一本一本まで観察してやろう。吉崎はうっとりと、それを手のひらで包みこみ、力の強弱を加えながら揉みしだく快感を想像した。甘美な愉悦が体内を走り抜ける。愛撫に硬くなった先っぽの尖りをつまみ、あるいは口に含み、この女のか細い啜り泣きを聞く悦楽はいったいどれほどのものだろうか。

　感動の波紋は果てしなく広がっていくのだが、吉崎が発した言葉はまるで心とは正反対の薄汚れた、侮辱的なものだった。

　「お前、乳輪、デカイなぁ。年増女みたいじゃないか」

　これぞ変質者の真骨頂なのか。女が美しく気高くあればあるほど、踏みにじり、おとしめてやらねば気が済まない。なにも彩の乳輪が本当に巨きいのではないのだ。たしかに彼女の乳輪よりも小さな乳輪をもった女は少なくないだろうけれど、それは彼女の清楚な魅力や可憐な娘らしさをそこなうほどではない。だが、吉崎の中傷は彩の心を爛れさせるにじゅうぶんであった。そんなものの面積の広狭で人間性の価値を判断されるなど、信じられない屈辱である。女を肉の塊として見ている男の本音を露骨な形で表現されて悔しくてならなかった。不覚にも涙がこぼれそうになったが、必死に我慢した。弱気な自分がまた情けなくなる。

　「オラ、露出狂の女子大生っ、まだ気がすまんのか。

いい加減にしてその助平なチチを隠してベッドに寝ろ。胸が悪くなるわ。色仕掛けで吟味の手を緩めさせようって魂胆らしいが、見え見えだぞ、菅野！　甘ったれるな！」
　どこまでも卑怯で狡猾な連中。彩の血気盛んな若者の堂々とした行動も、彼らにかかると、逆手にとられ、いいように辱められるのである。
　変態呼ばわりされた彩はキリキリと奥歯を噛みしめながら、上体をベッドに伏せていく。マットは一応あるものの、薄っぺらでスプリングの冷たく硬い感触が伝わってくる。マットのカビ臭い匂いも辟易とさせられる。
　完全に俯せの身体をベッドに横たえた。
　「バーカ、靴を脱がない奴があるか。菅野、お前、それでも最高学府の人間か？　俺は高卒だけど、その程度の常識はあるぞ」
　吉崎はチクチクとからかいながら、ソックスに包まれた彼女の足首をわしづかんだ。スニーカーの紐をほどきはじめる。
　「いい。自分でやる」
　彩は起き上がろうとしたが、傍らの御坊に剥き出しの背中をピチャッと手のひらで押さえつけられた。
　「いやっ、何するのよ！」
　脂ぎった不気味な感触。ジットリと掻いている汗はまさに変質者のそれ。汗の成分に弱い酸が混じっていて女

の柔肌をジュクジュク腐食させていくのではないかと思った。
　「騒ぐな、菅野！　いったんこのベッドに寝たからにはこっちが許可するまで起き上がってはいかんのだ。ほら、ここの、頭のところの鉄パイプを両手を万歳させてつかむんだよ」
　「……」
　背中を撫でまわされるおぞましさにこらえ切れず、彩は言われたとおり、腋窩を晒して腕をのばした。ヘッドレストのように鉄パイプが横に張っており、やや、腕をもちあげる格好で握り締める。
　吉崎は左右のスニーカーを脱がせた。
　「菅野、なんだか足が臭うぞ。どれ、ソックスも脱がせてやる」
　「あっ、何よ。やめてよっ」
　「ほらほらほら！　動くんじゃない！」
　御坊が怒声をはりあげ、手のひらを広げて動きだそうとする彩の繊細な背中を猛烈な勢いで叩いた。
　「痛ッ――」彩は仰けぞって苦痛に歯を剥いた顔を晒した。
　「動くなと言われたのをもう忘れたのか、菅野。頭の悪い奴だな」
　「そうだぞ、菅野。あんまり過ぎると治安局に対する不服従の罪で、このまま捕獲しなくちゃならなくなる。

そうなるのは嫌だろう」
　吉崎はソックスを巻き上げると口惜しそうに内側へ折り曲げている足指の先から抜き取った。パンストはつけていないのでこれで素足になる。すべすべしたピンク色の踵と清潔な足の裏。足首がまたほっそりとしていて、たまらない。
　吉崎は足の裏をくすぐって悲鳴をあげさせてから御坊と並んで彼女を見下ろした。
　シミひとつない美麗な背がうっすらと生汗を掻いている。いや、シミといえば御坊がさっきバッシングした部分が五本の指の形もまざまざと赫く痕になっていた。吉崎は御坊と顔を見合わせてニタニタと笑った。
　腕を頭の先へ、持ちあげ気味に伸ばしているため、肩甲骨がクリクリと浮きだしている。背中の皮膚の色とは微妙に違う腋の下はこういうインテリタイプ、行動派タイプの女子大生には珍しく無駄毛が処理されてある。不器用なのか無頓着なのか、剃刀の傷が小さく残っていた。乳ぶさが身体とマットの間に挟まれてムンと潰れている。乳肉が横からはみ出しているくらいだ。肋骨を透かせている脇腹が噴辱に喘いでいる。ジーンズがぴっちり貼りついている臀部の丸みがなおさら強調されているようだった。
　「……さ、さっさと済ませてよっ。肩が痛いわ！」
　黒髪を振って腕の狭間から顔をこちらに向けると、彩

は抗議した。赤ら顔は汗ばんでいて、どうやら涙のひと雫が頬を伝わったらしい。
　「だ、か、ら、早く済ませるためにも動くんじゃないの」
　御坊の鷲手が彩の後頭部をつかみ、マットに顔面を押しつける。
　「ンンーッ……」目と鼻と唇がマットに密着し、平面にされた。
　御坊はそのまま彼女の黒髪をまとめてひとつに束ねた。うなじ、生え際が一回りあらわになり、栗坊主状態。根元をギュッと握り、輪ゴムで二重三重に留めた。豊かな頭髪はパイナップルの葉のように頭頂部から噴出している。これで表情はなにもかも男たちの目に映るようになる。
　「終わるまで我慢しろよな。こっちも菅野のブス顔が完全露出でちょっと辛いが、我慢するんだからよ」
　いつのまにかブス呼ばわりされている。女を侮蔑する方法にかけてはとことん洗練されているといってよかった。
　「まず栄養状態を調べるからな。皮膚を一ミリ角、切り取ってコンピュータに分析させる。栄養失調の場合はすみやかに保護して治療する。将来の母体の健全化と擁護は女子教育課の使命だ。栄養の取りすぎは矯正の対象になる。このご時勢に非労働者である大学生の分際で贅

沢三昧は見過ごすわけにはいかないからな。さて、菅野はどっちかな」
　御坊は束ねられた黒髪を握って顔を起こさせた。マットに抑圧されていたため、鼻の頭がピンク色になっている。目はまだまだきつくファイトは衰えていない。
　それを嗤いながら御坊は尋ねた。
　「え、どっちなんだ？　けっこううまいものを食ってんだろ。大学にはそういうルートがあるっていうからな」
　「……あるなら、教えてほしいわよ……」
　「へへへ、どうでもいいが、お前、本当にブスだな」
　御坊は再び手に力をこめてマットに美貌を沈めさせた。怒りの呻きが心地よい。
　吉崎がピンセットとプレパラートを持ってきた。
　「ほんのちょっと、チクッとするだけだ。注射より痛くないさ」
　「……あなたたち、医師免許だって持ってないくせに」
　「顔をあげるなっ。菅野彩！　本当に捕獲するぞ！」
　「あんまり聞き分けがないと痛くしてやるぞ。それともお尻の肉にするか。パンツも脱いでさ」
　「好きにするがいいわっ」
　攻撃的な言動は、また挙げ足を取られて陵虐されるかもしれないと思ったが、黙っている気分でもない。

　吉崎は嘲ら笑いながら背筋が薄れて消えかかり、豊満な臀部の盛りあがりになっていく腰のくびれの部分の肉をつまんだ。贅肉がない女なのでそれ自体、そこそこの苦痛がともなう。つまみあげた肉にピンセットの尖った先端をあてがい、表面の皮を慎重に挟む。
　「ウムム……」
　「動くな。余計、痛いぞ」
　御坊が頭部を押す手に力をこめながら囁く。今、彩の顔がどんなになっているか、想像してニタついた。
　それは小さな小さな皮膚の一片であって、出血もなければ肉眼で痕跡を確認するのも困難なくらいであった。ピンセットの先にこびついたものをプレパラートへ移し、さっそくコンピュータにかける。結果は液晶パネルにすぐ表示された。ほとんどの数値はボーダーラインぎりぎりで正常の範囲内だった。ただカルシウムと炭水化物の摂取量が一線を割りこんでいるが、これとて不思議な数字ではない。日本のほとんどの女性は平時でもカルシウム不足だし、肉類脂物が少ない現状なのだから当然の結果といえる。大学生の中には飽食時代を忘れられず、米軍からハンバーガーだのフライドチキンだのを闇ルートで手に入れている者もいるらしいから、彩の品行方正さが忍ばれるわけだ。
　「まあだいたいパスだな。この程度なら後で三十分くらい栄養補給をしてやればいいだろう」

御坊はモニターを覗きながら言った。
「お次は体毛のチェックだな。これは遺伝子に欠損がないかどうか、即座に分析できる有り難い検査だ。もしおかしな因子が発見されたら、深刻な場合、卵巣の摘出といった去勢手術が義務づけられる。まあ、それは人口の一パーセントにも満たない数だから心配はいらない」
彩は己れの頭髪を握っている御坊の手を激しく首をふって振りほどき、ふりかえる。
「そんな非人間的な検査、拒否するわ。だいたいなぜ、女だけがそんな検査をされなきゃいけないのよ」
優性保護法の改悪強化も特務庁の仕業といわれている。
「菅野、簡単な理屈じゃないか。女は国の宝だ。民族の繁栄の礎だ。それに不良者が混じっていたらどうだ？国の将来は暗いぞ。お前は頭も顔も駄目だが、子供くらいは産めるだろう。こんなに巨きなケツとおっぱいを持っているんだからな」
「そうそう。安産型のケツしてるよ」
摘出しなければならない不良因子は、それはまさにこの男たちに違いない。いつか、必ずこの国から一掃してみせるわ……。彩は眉をピリピリさせて沈黙する。
「なんだ、菅野、その顔は。なにか腹に一物ある顔してるぞ」
吉崎は目ざとく指摘する。御坊もどれどれと髪をつか

んで自分のほうに向かせる。
　「なるほど不遜な顔だ。世間を小馬鹿にしてる態度だ。少し思い知らせたほうがいいんじゃないか」
　「そうスね。さっきから、こいつ、反抗的ですからね。こっちが紳士的なもんで、舐めきってるんですよ」
　「紳士的？！　は！」彩は思わず失笑した。「女を裸にするような紳士がどこにいるのよ！」
　二人の海猫は芝居っ気たっぷりに視線をあわせ、うなずいた。
　「……なによ……何する気よ？……」不気味なムードに彩は恐怖感を抱いた。
　「体毛検査は――」と、御坊はさきほどのピンセットをエタノールで消毒しながら言うのだ。「通常、頭髪を用いているが、別に頭髪である必然性はない。どこの部位の体毛でもかまわない。頭髪なら最も苦痛が少ないし、女性にとっても羞恥をともなわない場所であろうから選んでいるにすぎない。すなわちこちら側の好意であるわけだ。もちろん好意というのは相手が友好的な態度を示してこそ発揮されるものであり、反抗的だったり非協力であったりすれば、発動されえない美徳なのだ。当初からの菅野彩の言動、行動には一片の協調性も見られないばかりか、幼稚で無思慮な反抗的態度に凝り固まっていると判断できる。よって、我々も遺憾ながら心を鬼にして強権的対応を選択しよう。そうするのが長期的に

見て、未熟なお前の心根を一歩でも優良婦女子に近づける先鞭となるはずだ。愛の鞭を下すのに恐れる我々ではない」
　言い終えると、彼は彩の鼻先でピンセットをカチカチと鳴らしてみせる。
　「菅野、最近、お前、鼻毛切ったか？　あーん？」
　「バ、バカなっ――」
　彼らの陰湿な企みを知って美人女子大生は狼狽した。
　「ま、強権的対応なんて言ってもたいした話じゃないわな。鼻毛を抜かれるくらいだもの」
　嬉しそうな吉崎。彼の手には奇妙な形をした道具がぶら下げられている。二股に分かれた小さなフックである。
　「菅野の鼻って、尖っている、どちらかと言えば獅子鼻系だろう。上向いてアグラをかいているような鼻だったらピンセットも入れやすいんだけどな。お前のはこんなものでも使わないと駄目さ。ほら、これを両方の鼻の穴に差しこんで、この鎖を上に引っ張れば、見事な豚鼻の出来上がり。鼻毛摘出の作業もやりやすいってわけさ。合理的だろ？」
　と、吉崎はその鼻枷を自分の団子鼻に取りつけて、実演さえしてみせた。鎖がピンと引かれると、醜い肉の塊が持ちあがり、いっそう奇妙な形になる。鼻孔が天井をむき、鼻筋に何重も横皺が刻まれた。嘔吐感をともなう

不快さが彩を襲った。自分の鼻がああなるのを、いやでも想像してしまう。そしてピンセットを差しこまれ、鼻毛を引き抜かれるのだ。この汚辱感に比べれば、いっそ、局部の陰毛を剃られたほうがまだマシのような気がしてくる。
　「いやよっ、やめて！」彩はとうとうつかんでいた鉄パイプを離し、跳ね起きようとした。「バカにするのもいいかげんにしてちょうだいっ」
　上体がベッドのうえに起き上がると、双つの胸のふくらみがプルルンと垂れる。それまで固いマットに押し潰れていたので、その模様が肌にギザギザにうつり、乳首が乳輪のなかに引っこんでしまっている。自分の剣幕が当然彼らの激しい鎮圧行動を招くと身構えていた彩だが、予想に反して彼らはボォーッとしたようにその揺れる美乳を凝視しているだけだった。
　その機を逃すまいと、彩は身をこごめて二人の間隙を割るように体当たりを食らわした。素肌に御坊のカチッとした制服がめりこんでくる感じ。鍛えあげられた吉崎の肉体もコンクリートのようにごつごつとしていて、対抗するにはあまりに女の皮膚は柔らかすぎた。まるでラクビー選手の突進のトレーニングのように、びくともしないふたつの人形がつくる壁を踏みしめる足をスリップさせながら彩は懸命に押した。が、その努力に費やしたエネルギーの何百分の一の微小な力が、男たちの棍棒の

腕にもたらされただけで、彼女の身体はいともたやすくベッドに叩きつけられた。
　彼女は仰向けに倒れたが、見事な双乳はほとんどペシャンコにはならなかった。皿に落とされたプリンのようにゆらっと一二度、ブレただけである。
　まとめられた黒髪――それはこういった場合も想定してそうされていたのだ。簡単にわしづかめる――を吉崎が握った。彩はその手首に小さな歯で噛みつこうとした。一瞬速く、吉崎の反対の手が頬に飛んだ。美しい音が響いた。彼女の顔は鼻の骨が曲がるような力に振り飛ばされ、腰もそれにつづいて捻りながら突っ伏した。顔の半分が燃えている。目が開けていられなかったが、そのつぶった瞼の裏側は花火大会だった。抵抗をやめるかどうか、即断を迫られた。
　彩は乾坤一擲の力を両腕にこめて、握りあった双つの拳を砲丸投げのように振りまわした。吉崎の鼻面を狙ったつもりだ。残念ながら彼は敏捷な動きで攻撃をかわし、一歩、外へ後退した。
　「えいっ――」黄色い気合いの声とともに彩のスラリとした下肢が伸び、彼の股間を蹴ろうとする。衝撃が足首に走った。命中したのではない。吉崎の手がキャッチしたのである。残った片足をバタつかせたが、つかまれた足首を捻りあげられると、身体がねじれていくのに抗えなかった。

「そろそろ、ヒステリーも燃料切れ、だろうな」
御坊の声がちっとも動揺していない事実に彩は敗北感を覚えた。
御坊は必死にマットに突っ張って身体を起こそうとしている彩の手をつかみ、再びベッドの鉄パイプに持ってくる。それまでしまわれていた拘束ベルトを取り出すと、折れそうなほど細い手首に巻きつけ、キッチリ締めあげた。
「……ウウッ……ち、ちくしょう……」
「そんな汚い言葉を使ったら、天国の両親が嘆くぞ」
両腕の自由を奪うと、頭髪をもって顔を起こす。真紅に染まった美貌へ往復ビンタを弾けさせた。彩の首ががっくりとマットへ折れた。
「若者の暴走には社会は厳しくあらねばならない。吉崎、ズボンとパンツを脱がせ。御灸をすえるんだ」
吉崎は無言でうなずくと――もうその目は欲望でギラギラになっている――ジーンズの腰に手をかけた。顔を張られて力が抜けているのをいいことに、腰を浮かさせ、ベルトを外す。抜き取り、ボタンを毟りとるとジッパーをおろした。ベージュのパンティがムッをふくらみを見せる。くびれた腰にピッチリ身についているジーンズを、ヒップの丸みをくぐらせながら剥きおろした。ピチピチの双臀がパンティをひとつの皺もなく張りつめさせていた。真っ白な脚線が露出していき、とうとうジー

ンズが取り去られる。無造作にパンティのゴムに手をかけ、一気にさげる。
　彩は意識があるようだったが、言葉は発しなかった。哀訴するのは惨めさをつのらせるばかりと判断したのだろう。ドロドロの溶岩のような屈辱が彼女を苛んでいるのは、曝け出されているうなじから、そのつけ根までが朱色に染まっている変化からもわかった。
　ついに男たちの目の前に出現した桃尻……。ムチムチと若さがみなぎる発育途上の球体だ。それほど巨臀ではないが、腰がよくくびれているので、グラマラスに見える。臀丘は白人族のように丸く、クリクリしていた。スッと通っている割れ目はキュートで、その底にあるはずのヘアバーガーをいやでも連想させてくれる。今は太腿をぴったりと閉ざして空気の侵入すら拒んでいた。
　吉崎と御坊は協力して左右の足首をベッドの隅の皮ベルトに拘束した。
　「……ああ……」
　さすがに小股に開かされる恥辱は彼女の口を緩めさせ、ちくしょう！　などと吠えたてたさっきの剣幕とは正反対の弱々しい声を洩らさせるのだった。
　足も手と同じようにマット面からほぼ十センチくらいの高さに持ちあげられている。ベルトが短いので膝に余裕がなくなり、下肢全体がしなりながら浮き上がっていた。胴体部だけがようやくマットについているドぎつい

格好であるわけだ。股関節が痺れるように痛んでいるはずである。
　当然、跨ぐらの様態は生え具合と媚肉の構造まで観察が可能だった。二人の男のこれまでの言動を考えれば淫らで聞くに耐えない指摘がなされるのは避けられるわけもない。しかし彼らはどこまでも狡猾だった。声を上げてあげつらうのを控え、ヒソヒソと小声で囁きあい、じゅうぶんに間を取ってからカッカッカと失笑を漏らすといった、羞恥を煽るような卑劣さを見せるのである。
　塞ぎたくてもふさげない耳はどうしても会話のすべてを聴こうと神経を集中させてしまう。それがまた口惜しい。
　「……土手が……じゃないだろう、きっと……モジャモジャ……」
　「……けっこう……でるんじゃないですか……色も……名器かも……」
　カァーッと頭に血が昇り、額から流れてくる汗が眉を濡らし、瞳に流れこんでくる。
　「菅野、少しは応えたか。あん？」
　「暴れなきゃこんな目にあわずにすんだものを」
　二人は頭のほうへまわってきた。どんなに嫌がっても頭髪を握られれば恥ずかしい赤ら顔を晒さねばならない。あまりの屈辱感に歯の根があわなくなり、カチカチと鳴った。

「凄い格好にされちまったなあ、え？」御坊が熱に火照っている頬をつつく。
「……」
「お前は犯罪を犯したんだから、仕方ないんだぞ。逆恨みするなよ。自業自得、わかるな」と、吉崎。
彼は弓なりに反っている背中を撫でさすった。
おぞましさか、それとも緊張しているので敏感なのか、そうされると彩の目が細くなり、大きく息を吸いこんだ。美しくカーブしている小鼻がヒクヒクと微動する。
「さて、最初からやり直しだな。体毛による遺伝子チェックだ。覚悟はいいだろう。この際、一本残らず抜いてやるからな」
頬のニキビをピンピン弾いていた指が彼女の鼻頭をこねまわした。口をへの字に結び、からかいに耐える彩。
吉崎が例の鼻枷を持ってきた。彩の呼吸が荒くなる。今にも叫びだしたいのだろう。汗ばんでいる顔に新たな生汗が玉になってしたたった。十九歳の裸身から立ち昇る甘い汗の匂いはどんな香水よりも刺激的で気をそそった。面白いのは、薔薇色に輝く頬に掻いた汗の匂いと、頭の地肌を濡らし、漆黒の黒髪に浸透させてきたその匂い、あるいは肩甲骨のあえかな窪みにたまった汗水の匂い、とくに脂ぎっている感じの腋の下の滲み、尻梁に玉となって浮かび、狭間へつつと流れこんでいく汗の匂

い……等々は、それぞれに微妙に種類が違うような気がしてならない事実である。どれも捨てがたい蠱惑の媚薬であったが、それらがブレンドされひとつになった体臭こそ、生唾もののフェロモンといえた。
　このフェロモンがいっそう濃厚になるのはセックスの最中の助平汗なのであろうが、さて、美貌の芯とも言える鼻を醜く歪められたときに絞りだす苦渋の汗の匂いはいかがなものであろうか。
　御坊が逃れようもないように髪とあごをしっかりとつかんで固定した。吉崎は鼻から激しく呼吸して身体全体さえもわななかせている彩を小気味よさそうに眺めながら鼻枷を額から垂らした。残虐な鈎状のフックが鼻筋にコツコツとあたる。
　「……赦して……」
　決して口にすまいと決意していた哀願の言葉が反射的にこぼれでた。大きな黒目がギョロと動いて吉崎を見上げる。
　「へへへ。三十分前にその殊勝な声が聞けていたらな。ま、観念することだ」
　冷たいフックの先を鼻孔に差しこまれると、彩は生まれてこのかた経験のないほどの汚辱に襲われた。軽い力が柿の種状の美しい鼻孔の肉の縁にかかってきた。柔らかく筋肉のかけらもない小鼻が押し上げられる。
　「う……ううっ……」額に力が入って皺が生まれ、眉

が逆八の字に吊り上がり、寄った。スッとかたちよく尖っていた鼻頭が潰れながら引っ張られ、しだいに鼻孔が縦長になっていく。鼻筋には圧縮された肉の皺が刻みこまれ、色も艶やかなピンク色から濃くなっていき、プチトマトのように染まりつつあった。

「もっと顔の力を抜かないと、かえって痛いんだぞ」

彼女の容貌から美のかたちが消滅しつつあった。鼻の面積など顔のなかの十分の一も占めていないだろうに、ただそれだけをめくり返しただけで、無残絵さながらの惨状である。引き伸ばされた鼻孔は豚を連想させる。考えてみれば名画のなかにひとつでも汚点があれば、それは名画としての価値がなくなる。いや、他が素晴らしいばかりに汚点がかえって際立って、より醜い印象を与えるのかもしれない。今の彩もそうだ。美が無に帰したばかりでなく、マイナスに転じて豚にも劣る醜悪を晒しているのだ。

充血した目から涙が溢れてきた。噴き拡げられた鼻孔からは透明な洟汁も流れてくる。鼻につられるように、上唇も持ちあがり、白い歯と珊瑚色の歯茎がかいまみえる。

それでもまだフックはグイグイと引き上げられていく。

「あ、ああッ……ちょっと、ちょっと休んで……」

「甘えるな、女子大生！　労働者はなあ、毎日もっと

辛い目にあっているんだ！」
　わけのわからない理屈を言いながら、御坊は黒髪とあごを手放した。そうしても、すでに彼女は暴れられない。ちょっとでも顔を揺らせば、激痛が鼻骨に走るであろう。
　御坊はピンセットを手にして戻ってきた。

　　闇を走る裸身

　鼻枷に繊細な肉をえぐられ、鎖一本で仰けぞらされる、精神的にも肉体的にもこらえがたい懲らしめをほどこされた彩。首筋は外から見ていてもときおり痺れの電流が走り、ピクピクと痙攣しているのがわかった。うつぶせとはいえ、全裸にされて磔られ、下肢などはいっぱいに引き伸ばされてふくらはぎが痙ってさえいる。その微妙な身体の緊張と平衡はわずかな嗚咽でも傾き崩れ、肉体に苦痛を走らせた。
　汗まみれの裸身はヌルヌルと絖光り、なるほどこれが若い娘の苦渋の体臭かと膝を打ちたくなるほどの甘酸っぱい芳嗅を醸し出していた。
　「よしよし、すぐに済ませてやるからな。辛抱しろ辛抱しろ」と御坊は額の汗を拭いてやりながら言った。
　そしてピンセットをすぼめて、そーっと鼻孔に差しこ

んだ。
「くーっ……」目を猫のように細め、鼻の下を伸ばしたり縮めたり、プライドもなにもなく彩は滑稽な百面相を繰り返して少しでも苦痛を和らげようとする。
銀色のピンセットの先がかなり奥まで侵入すると、長い鼻毛を選びだし、つまんだ。
「ヒッ――」自分でも情けないと思ったが、声が反射的にでてしまう。
一思いにピッと引きぬけばいいものを、わざわざ時間をかけて引いたり離したりする卑劣な拷問。鼻毛の植わっている肉が痛められると、涙腺が刺激され、涙がボロボロこぼれてくる。洟汁も噴き放題。顔はもうグシャグシャである。
「なかなか強情な鼻毛だな。ペットは飼い主に似てくるっていうが、こんなものまで持ち主に影響されるものなのかねえ」
散々、嬲りものにした後、御坊は手首をしならせて引き抜いた。
「あン――」あまりの恥辱に涕泣する彩。
「ホラ、こんなに長いんだから。ちゃんと見ろよ」
残酷に眼前へつまみ取ったものを突きつける。さすがに彩は目を閉ざしたままだったが、いきなり可愛らしいクシャミをした。一拍遅れて、男たちの大爆笑。
御坊はそれからも何度も彩の鼻孔を弄んだ。吉崎も彼

と替わり、自分に挑みかかり拳を振りあげ、足蹴を食らわそうとした小癪な美人女子大生の鼻毛を痛快な気分で抜いてやった。彼女に対する恐れに似た憧憬も払拭されたようだ。こんな女をアイドル視して尻を追っていた自分が矮小に思えてくる。目の前にフガフガ足掻いている豚女などにどうして海猫の一員たるこの俺様が右往左往しなければならないのか。

（成長なんだなあ、ようするに。こういう繰り返しで野辺地大洋局長のような冷酷な司令官に鍛えられていくんだよなあ）

難解な課題を克服した喜びが彼の胸にあった。デロデロに汚れ切った菅野彩の美貌に嘲笑を浴びせながら吉崎はもうほとんど残っていない鼻毛をさらに探り、やっと見つけてそれを引きぬいた。

鎖がおろされ、枷が取り外されると、彩は精根尽きたようにドタリと顔を落とした。

「よかったなあ、菅野。これで彼氏に抱かれてどんなにヨガッても、なーんにも心配せずに鼻の穴をおっ拡げられるわけだ。感謝しろよなあ」

小刻みに慄えている彼女の肩を叩きながら、吉崎はシャーレにパラパラと落ちている鼻毛を分析器に持っていき装填した。

「さ、顔を拭いてやろう――」

御坊は用意した蒸しタオルを正常の形に戻った美貌に

あてがい、ゴシゴシとこすった。涙、汗、洟でボロ雑巾のようになっていた彩の顔はすっかり清拭されたが、まだ鼻頭はほんのりと赤いし、気力を吸い取られたように茫然自失の青ざめた表情である。だから手足のベルトを外され、今度は仰向けに引っ繰り返されて再度、拘束を受けたときもほとんど反応は示さなかった。
　汗のひいた、水晶のように透明感のある裸身のなかに浮草のようにぽっかりと目立っている股間の茂みが目に沁みた。頭髪よりも黒いのではないかと思われるその密集は平均よりも少し面積の大きな小判型をしている。
　「乳輪といいココといい、けっこう好きもんなんじゃないの。このインテリ女子大生は」
　「やっぱ、やりまくっているんですよ。あの男と」
　「それじゃ、精査してみましょう。彩ちゃんが、どういう性生活を営んでいるか、じっくりとね」
　二人はさっそく用意をはじめる。その間も彩はじっと装甲車の無機質な天井の模様へ視線をやっているだけだった。なにも聞こえず、なにも見えず、なんの思考もない。空っぽの頭と身体――。
　ワゴンに乗ったコードだらけの機械がベッドの横に押されてきた。御坊のほうは液体の入った茶色の薬瓶とスポイトを持っている。
　「――いろいろと検査した結果、お前には肉体的欠陥がないことがわかった。ま、健康優良児と言ってもいい

だろう。しかし最も注意を要し、危険な行動に走りがちなのは、まさしくその健康優良児であるのも事実なのだ。とくに若くて健康体の女は常々、不純異性交友や淫行の誘惑を受けやすい。我々の重要な使命のひとつは、そういった社会の魔の手から女性を保護し、かつ、そこへ足を突っこんだ女性へのリハビリの実践にある。むろんそれには彼女がどういった性生活を営んでいるか、トレースする必要があるわけだ。女性自身の告白は信用すべき任意性が低いのは言うまでもなく、もって、開発されたのが、この精液検出法――正確には田中・ベルグマン式反応法――である」

御坊は小瓶の蓋をとりスポイトで中の液体を吸い上げた。バリウムのような白い液体だった。彩は依然として何の感情もあらわさず、ぼんやりとそれを見つめている。

「これを精液が排泄されたと思われる身体の部位に落とすと、色が変化していく。つまり最大一ヵ月前までの性交渉が詳細にわかるわけだ。精液ばかりでなくパルトリン氏液の分泌にも反応するから、その性交渉が本番かペッティングかの判断までできる。色の濃淡をこの機械で判読すれば、分刻みの分析も可能という、まさにハイテクノロジーの粋を結集した利器といえるだろう」

「さて、菅野。お前は最近いつ、彼氏とＨしたんだ？」

　吉崎は彼女の頬っぺたをつついた。よほど気に入ったのか、またニキビのところをである。

　この章の残りは有料本編でお読みください。

　　美人検事はカラオケがお好き

　狭いカラオケボックスは懐かしい大学の同窓会から流れてきた十人前後のグループで満員だった。
　ワイシャツ姿でネクタイを緩めた鼻の頭の赤い男――三十くらいの年格好――がマイクを握り、呂律の回らない松任谷由美を歌っている。拍手をしたり野次ったりしているまわりの連中も似たようなもので、それぞれかなり酔いが回っているようだ。カラオケが終っているのに、まだ彼は一小節前を歌っていたが、一段高くなっているステージから引きずりおろされた。
　ソファで折り重なるようにくつろいでいた男女のなかから司会役の男が前に出てきて、マイクを握った。
　「さーて、お次は我らがワンダーフォーゲル愛好会の最終兵器の登場です！」
　彼は拝むように自ら拍手をする。口笛が鳴らされ、ヤ

ッホーの声がこだまする。
　「在学中に司法試験にパスした才媛ながら、かたわら、この愛好会の会長も務めきり、日本アルプス縦走をも敢行してしまった行動派……その人の名は！」
　マイクを観客席に突き出し、答えさせる。皆、その時ばかりは声をそろえ、叫んだ。
　「でんぽー・ゆかりィーっ――」
　どっと拍手が沸き起こった。ひやかしではない、本物の拍手。彼らがその名前にどんな感情を抱いているか、明白にわかる。
　一人の女が立ちあがった。表情はにこやかで、目元と頬がうっすらと桃に染まっている。ブルーのサマーセーターに白のスラックスをはいていた。
　誰かの足を踏まないようによろけながら、ステージへ向かう。成熟した腰がセクシーに揺れる。肩まで無造作に垂らした黒髪が薄く化粧をひいている頬にかかる。
と、彼女は何かにつまずいてバランスを崩しかけたが、傍らの男の頭をむんずと抑えつけ、体勢を保った。笑いが起こった。
　「『三枚腰のゆかり』がふらついてるぞ！」
　誰かが野次ると、彼女はキャハハを笑い、「年よ、年」と華やかな声で答えた。セーターの胸はそこそこにふくらみを感じさせ、豊満とは言えないものの、プロポーションは悪くない。

　男どもを踏み越えながらステージまでたどりつくと、浴びせられるスポットライトに瞳を眩しそうに細めつつマイクの調子をたしかめる。どちらかと言えばタヌキ顔に分類されるだろう。それでも丸顔を連想しないのは、輪郭は丸みを帯びているのに、顔の肉が薄いからだ。鼻筋も通り、高い。真ん中から分けた前髪を垂らした額も冴えた感じ。どれもが彼女の知性の豊かさを物語っている。丸顔につきものの愚鈍の印象とは無縁なのであった。
　司会の男が声を引っ繰り返して絶叫する。
　「現在、東京第二検察部勤務！　現職の検事としてバリバリ働き、凶悪犯を慄えあがらせている我らがマドンナ、伝法ゆかり！　粘り腰のゆかりが法廷で鍛えたノドを聴かせます！　歌は津軽海峡冬景色ィィィ！」
　カラオケの前奏が始まった。
　「みなさん今晩は。楽しいですね。もう七年、たってるのかな？　卒業してから。ン？　あ、そりゃ前田くん、あんた留年したからでしょう。え？　ああ、そうか、三年前にもＯＢ会、やったんだったね。私はあの頃、検事になりたてで褌かつぎしてたから忙しくって来られなかった。今日は偶然にも何年かぶりの夏休みとかち合ったんで来られました。懐かしい顔と再会できてこんなに嬉しい夜はありません。なお、何か事件に巻きこまれた際には私にご一報ください。優秀な弁護士、紹介

しますから……」
　笑いをとって、ぴったり前奏が終る。伝法検事は心地よさそうに目を細めながら演歌を歌いだした。酔いはあるのだろうけど、なかなかこぶしの効いた声量のある歌唱力である。若い頃、山歩きで鍛えられた心肺機能は今でも健在だ。もっとも検事の仕事だって体力が必要だったはずだ。特務庁治安局に司法捜査の主導権を握られ、仕事といえば交通事故の処分くらいしかないという、検察全体が完全に干される状態になる以前には、である。
　検察庁自体、解体されてしまっていた。
　今では『東京第二検察部』と、どこかの省庁の一部署みたいな名称をつけられ、おとしめられている。人員も大幅に削減、優秀な人間はバージされた。女性であり、まだ若く役職についていなかった、それだけの理由で伝法検事はなんとか粛正を免れたのだが、彼女の才能を発揮する機会は失われた。永遠に――永遠に？　いやそれはちょっと違う。伝法は歌いながら腹の内側でニヤリとした。
　（私を見逃したことを後悔する日がきっとくるわよ。海猫の諸君。少なくとも君たちの全勝記録が途切れるのはそう遠くないはずだわ）
　歌はストリングスとブラスセクションの重厚な音で盛り上がり、クライマックスを迎えた。伝法は美麗な節回しと、ふり、まで披露してヤンヤの喝采を全身に浴び

た。この喝采が海猫打倒の際にもたらされる勝利のそれだったら、どんなに気持ちいいだろうか……。
　歌い切らぬうちに腰のポケットに入れておいたポケットベルが鳴りだした。丸い尻に手をやり、ポケットのなかを探ってベルを消す。一応、最後まで歌ったけれど、座は何となく白けた。
　「御免ね。置いてこようかなとも思ったんだけど、つい働き蜂の癖が抜けなくて……」
　司会役が出てきて、今度はしごく冷静に話した。
　「仕方のないところでしょう。ゆかりさんの仕事を思えば、避けられない成り行きです。みなさん、激務をぬって参加してくれた伝法ゆかりに盛大な拍手を！　ド演歌を熱唱してくれた三枚腰のゆかりに万雷の声援をお願いします！」
　呼応するように全員が立ちあがって拍手をした。彼女の存在は抜きんでたものであるのだろう。カリスマ的であるのだ。自分たちの青春のシンボルであり、現在、暮らしていくうえでの励みにすらなっている。
　伝法は恐縮しながら笑顔をふりまき、ボックスを後にした。
　外に出ると、静寂がどっと押し寄せてきた。いくつかあるボックスも満員で幸福な乱痴気騒ぎが展開していた。ふと、自分がまったく場違いな領域にいるような気がして孤独を感じた。喧騒が耳鳴りに残っている。彼ら

のような生活には二度と戻れないのだろうと思う。
　海猫に刃向かう決意をしたこれからはなおさらだ。
　トイレを見つけ、入った。バッグから携帯テレビ電話を取り出すと、記憶ダイヤルを押した。伝法検事が所属する東京第二検察部をコールする。
　二十秒ごとの静止画像を表示する液晶画面に、見慣れた、退屈な、不愉快な男の顔が映った。伝法の直属の上司である田沼検察部次長である。無表情な、いかにも官僚タイプの顔つきのこの男は液晶の静止画でみると、ますます陰険に見えてくる。伝法は電話についている小型カメラに向かって精一杯頬笑んでやった。
　「酔っとるのかね？」
　赤ら顔が再生されたらしい。そういえば次長のデスクのモニターは解像度抜群の最新式のタイプだ。不機嫌そうな声。いつもより、さらに機嫌が悪い。
　「はあ。カラオケパーティの途中でしたんで」
　「カラオケ？」
　田沼の声には嘲笑と軽蔑の念が露呈されている。カラオケなどといった一般市民の遊興にはまったく無理解なのだ。
　「次長、私は夏期休暇中ですから。できれば呼び出しは控えて戴きたいと思います」
　「そうだったな。君は夏休みをとっていたんだ」
　新たな静止画像。前の画像となんら変化がないのに伝

法は失笑を洩らす。
　「何がおかしいのかね」
　「あ、いや。他意はありません。なにしろアルコールが入っておりまして、伝法は少々酔っ払っております」
　「まあ、それはどうでもいい。休暇は打切りだ。すぐに検察部にくるように。これは局長命令だから、反抗は赦されない。わかるね。いつもの君の柄の悪い怒鳴り声と皮肉めいた口は受けつけんからな。すぐ来い。今すぐだ。以上――」
　「あ、次長、待ってください」
　「だから口答えは受けつけんと言ってるだろ……」
　田沼はそこで言葉を閉ざした。すでに電話は切れている。だが切れる寸前にシャッターが押されたらしく、デスクトップのモニター画面に伝法検事の最後の映像が送信されてきた。田沼は苦り切った顔になる。そのカラー映像には酒気帯びで火照った、あの生意気な部下の伝法ゆかりの顔が映っていたが、彼女はこちらに向かって、じつにアッカンベエをしているのだった。

この章の残りは有料本編でお読みください。
######

伝法ゆかりの攻勢

　その日、伝法は事務官をともない、記者会見の席に座っていた。フラッシュが白のスーツをまとった美人検事に激しくたたきつけられた。彼女にはほとんど上気したところがなく、いつものように冷静沈着で自己抑制がなされているようだった。
　しかし彼女を知っているものが見れば、かなりの驚きを覚えないわけにはいかないだろう。今日のその美貌にはかなり濃いメイクがなされていたからだ。勤務中の伝法はほとんどが素っぴんであったし、改まった場所に出席するときも薄く施されていたにすぎなかった。仕事柄、今日のような記者会見――これほどの大がかりなものはかつてなかったけれど――も幾度か経験していたわけだが、その時だって格別入念な化粧がなされたわけではない。
　伝法ゆかりがこの一件にかける執念と意気ごみ、あるいは緻密な計算と計画がその女優の如きメイクに表れているといってもよかった。なぜなら多くの美人キャリアウーマンがそうであるように、彼女もまた『顔』で実績を上げていると思われるのを極度に嫌っているわけで、そういった思い入れをすべてうっちゃって、利用できるものはすべて動員する、いわば、背水の陣を布いたのである。

『美人検事、海猫に挑戦状！』
　こうした夕刊紙まがいのセンセーショナリズムはしかし世論の耳目をひくには手っ取りばやい方法かもしれなかった。まさにその世論こそ、今の伝法にとっては唯一最大の味方といっていいのである。このバリアが張られているうちは海猫といえどもそう簡単に手をだせないはずなのだった。
　「――Ｋ大学法学部二回生、菅野彩の告発状に基づき、東京第二検察部は特務庁治安局女子教育課、課長、御坊大介ならびに課員、吉崎京太郎を召喚し事情聴取するものであります――」
　どよめきが起こった。すでに発表の内容はコピーされて記者の手元に回されていたのだが、改めて伝法の澄んだ声で聴くと、衝撃度が倍加される感じなのだろう。天下無敵、飛ぶ鳥を落とす勢いの海猫の聖域にメスが入れられようとしているのだ。しかもあのまだ若い、独身の美女にである。
　伝法ゆかりが組織の看板娘的な付け足しの存在でないのは周知の事実だったが、やはり新鮮な驚きを覚えないわけにはいかない。とかく淫靡な噂の絶えない女子教育課への捜査主任が女性であるなんて、これは痛烈な皮肉に違いなく、海猫の逆鱗に触れずにはおかないだろう。そしてこの異例の記者会見――まだ事情聴取もされていない段階で、それも被告発者の氏名を公表さえするのは

慣例に反した人権侵害ぎりぎりの夜討ちといってよかった。まあ、海猫と検察部の力関係を考えれば、この程度の奇襲作戦は当然なのかもしれない。スポーツ紙のどこかが太平洋戦争における日米になぞらえて、
『タイガーレディ、宣戦布告！　トラトラトラ』
などと見出しを踊らせるのが今から目に見えるようだ。
「当該被告発者二名は当日、帰宅途中の菅野彩を装甲車内へ拉致連行し、次ぎたる陵辱を加えた――
一、不必要に着衣を奪い取り、
一、露出した素肌に猥褻な手淫を仕掛け、
一、体毛摘出による遺伝子検査なる合法外な検査を、ことさら恥辱を与える意図をもって菅野彩の鼻孔内の体毛を摘出し、
一、そのおり、鼻枷なる器具を取りつけ、……
一、最も卑劣なる行為は、菅野彩の性生活の統御管理を意図し、乳頭部及び陰核の計三ヶ所へ去勢リングをなる器具を装填したことである。この驚くべき機能は……」
伝法が発表を終えると、一斉に質問がなされた。質問は菅野彩の人物像にまず集中した。
「女子大生ということですが、コマンドの一味なのではないですか？」
「違います。彼女はそういう組織に加担してはおりま

せん」
　「菅野彩の友人の多くがコマンドの一員だとする情報もあるんですがね」
　「この時代、大学の校内を歩けば、コマンドの関係者と出会わない方が珍しいでしょう。友人に関係者がいたとしても不思議ではありません」
　「彼らに菅野彩がオルグされかけられている可能性も否定できないんじゃないですか」
　「私にはあなたがなぜそれほど菅野彩とコマンドの関係に固執するのか、理由がわかりませんね。これは政治が絡んだ事件ではないのです。卑劣な陵辱虐待行為なのです。被害者の思想性は問題の本質ではありません」
　伝法はその記者を冷然と見下した。
　「……しかし、こういった記者会見の場合、告発者も同席するのが普通でしょう。それがここにはいない。勘繰らざるをえないのじゃありませんかね。写真や録音をとられてはまずい理由があるんだと」
　「彼女は事件を告発するとともに、人身保護の請求もしてきました。検察部としては検討の結果、その蓋然性ありと判断し、身柄を安全な場所へ移動させたのです。他に理由はありませんね」
　「蓋然性がある？　それは海猫への宣戦布告ですか？」
　「そういう話ではない。私兵集団によるテロリズムへ

の警戒です。治安局が市井のテロ組織とつながりがあるとは検察部では考えてはおりません」
　「ある筋の情報によると、次回の人事異動を念頭にした、伝法検事のスタンドプレイではないかとの噂があるそうですが、どうお答えになります？」
　伝法の表情は少しも変化を見せなかったが、目だけは鋭く光った。
　「あなたはずいぶんと情報通でいらっしゃるようだが、いったいそれはどこから流された情報なんでしょうね。あなたが菅野彩とコマンドの関係を憶測するように、私はあなたと治安局との親密な関係をつい憶測してしまいます」
　舌禍も辞さない伝法の厳しい態度にその記者――むろん海猫の御用記者であるのは業界での周知の事実である――は気色ばんだが、声を荒げれば荒げるほど、彼女の冷静さが浮き立ち、正義の味方ぶりが強調される。この模様はテレビで全国中継されているのだ。彼を狂言回しにして世間に自分の人となりを印象づける作戦はまんまと成功したようである。
　「女子教育課が事情聴取に応じない場合、どうされるおつもりですか？」
　別の記者が手を挙げる。
　「そういう事態にならないことを期待しておりますし、治安局も国家の法秩序を守る我々と同じ使命を帯び

ているわけですから、すみやかに協力してくれるものと確信しております」
　「応じない場合は逮捕もあるわけですね」
　「ない、と言うわけにはいきませんね。法律の定めるところに従い、しゅくしゅくと事を運ぶだけでしょう」
　「できるんですか？」
　皮肉たっぷりに誰かが言った。反海猫系のジャーナリストだ。
　「質も量も今の検察部と海猫じゃ比較にならんでしょう。これまでも何度か芽はあったけど、たちどころに潰されてきたじゃないですか。ま、検察部の上層部もなぜかむこう側に協力的でね。あなたの勇気は買うけれども、私は懐疑的ですね。事情聴取はもとより、逮捕なんてとてもとても無理なのでは」
　伝法は紅くぬられた唇をゆるめ、静かに頬笑んだ。
　「たしかに、かつて検察部の上層部が無気力だったのは認めましょう――再びどよめき――だが、今や事態は好転しているのです。我々は強固なチームワークで結ばれたユニットです。機動性に富み、かつ伝統もある。かなうかなわない、といった論法の是非はさておき、じゅうぶん仕事はできる、とだけお答えしておきましょう」
　「強固なチームワーク？　するとあなたと田沼次長もしっかりと結ばれているのですか？」
　「むろんです。字義どおり、正確な意味においてです

が――（失笑）」
　「かえって心配になったな。あいつと一緒じゃ、オイルタンクを背負って火の海に飛びこむようなもんだ（爆笑）」
　この記者を殺してやる！　そして伝法もだ！　テレビの画面に呪いの言葉を投げつけているのは田沼その人である。この記者会見の設定を伝法は一言も田沼に伝えていなかった。まったく疎外されたわけである。昨夜、うまく丸めこんで統制下においたと思ったのに、一夜明ければこのザマだ。知っていれば会見自体、握り潰すか、規模を大幅に縮小させたに決まっている。テレビ中継などもってのほか。これではヒロインの誕生ではないか。おまけにこの私をいいようにコケにしおって。
　ブラウン管のなかで自信たっぷりに微笑している伝法の美貌。化粧のおかげで何倍も綺麗に見える。それがまた癪に触った。
　（だったら、いつも化粧してこいっていうんだ。男の目を楽しませるのも女の務めだろうが、クソッ）
　坊主憎けりゃ袈裟まで憎いの喩どおり、伝法の一挙手一投足に腹が立ってしょうがない。しかしこれでは必要以上に海猫の反発を買うのは目に見えている。田沼の目論みをはるかに越えて事態は進展しつつある。
　（いかんぞ、こいつはいかん。ヘタすりゃ、こっちまで巻き添えだ。考えろ、考えるんだ、田沼！）

　頭を抱えて善後策を思案していると、デスクの電話が鳴った。
　「俺だ。ン？　治安局から？　で、相手は誰？　野辺地大洋！　は、早くこっちへ回せ！」
　田沼は汗ばんできた手で受話器を握りしめ、ハンカチで額を拭いながら泣く子も黙る治安局局長の声を待った。
　――一方、記者会見場では質問も佳境をすぎていたが、一人の、社会部のクラブでは見かけない顔が手を挙げた。
　「えー、伝法検事は独身主義者なのですか？」
　「は？」
　「いえ、そのお美しさと才能を兼ね備えたキャリアウーマンに求婚する男性が今までいなかったとはとても思えませんからね」
　この男はいわゆる芸能レポーターで、伝法がなかなかの美人と聞きつけて紛れこんでいたらしい。しかしこれも伝法側の意図的な『仕こみ』だった。騒ぎをコップのなかの出来事に終わらせたくない。火事は大きいほど観衆が集まるのである。
　「できればスリーサイズなんかも教えていただければ嬉しいのですが」
　「スリーサイズですか……」苦笑する伝法。「そうですね、Ｃに近いＢカップ、でしょうかね」

　これには社会部の記者連中も唖然とした。まさか彼女が素直に答えるとは。『巨乳検事、奮戦す』などという見出しがでたらどうする気だろう。
　「カラオケがお好きだそうですが」
　「ええ、石川さゆりや都はるみはほとんど歌えます」
　「ところで鷹乃山関との不倫の噂についてご感想は？」
　「馬鹿な。『猫の海』で手一杯って時に（笑い）」
　社会部の記者が咳払いした。『一見さん』の質問はそれまでとなった。
　「最後に検事ご自身の海猫に対する率直な感想をお聞かせ願えませんか？　サイズも披露したんだから、それくらいいいでしょう（笑い）」
　「そうですね――」伝法はしばし思案したのち、口を開いた。「かつて我々、官僚機構がそうだったように、彼らもまた市民への情報公開という課題に直面しているのだと思います。歴史が浅く、好むと好まざるとにかかわらず、急速に肥大化した組織は往々にして市民のための存在であるはずの、本来の官僚の職分を忘れがちです。それだからこそ、彼らは今一度、原点にたち戻り、自らブレーキを踏む勇気が必要なのではないでしょうか。はなはだ僭越ではございますが、私が意見を求められれば、こう答えるしかありませんね……」
　記者会見は終了した。

この章の残りは有料本編でお読みください。
######

対決

野辺地局長のデスクに呼びつけられた御坊課長と吉崎は青ざめた表情を並べていた。
野辺地は予想に反して激怒してはいなかったが、それがまた腹に応えるほど圧迫感になる。とくに吉崎は野辺地に私淑して海猫に加わった経歴の持ち主なので、余計、コチコチになっていた。保身のためではなく、『局長の顔に泥を塗った』事実にこそ、問題があるのであって、激しい悔悛の情に責められていた。
一方、御坊課長の頭は完全に虚ろな状態であった。それでなくとも治安局における女子教育課の地位はきわめて低く、肩身の狭い思いをこれまで幾度もしてきたのだが、今回のこの失点によりそれは決定的なものとなったといっていいだろう。女子教育課課長のポストに任命されて以来、局内の出世レースにはまったく無縁の存在に甘んじていたわけだが、出世レースはおろか新たなる――さらなる？――閑職の地位へ移動させられるのはも

はや動かしがたい現実に思えている。
　二人とも思いは違いこそすれ、シクシクと胃の痛む状況には変わりがなかった。
　いや、もうひとつ、同じ感情が体内にあった。それは菅野彩に対する怒りと、それをうわまわる伝法ゆかりへの遺恨である。まだしも、菅野彩の場合は納得がいかないわけではない。もちろんまったく予期せぬ告発であったけれど、彼女は女子大生、つまりまだ社会の仕組みに無知な青二才。軽率な行動をとったとしても仕方のない面もあろう。最後は屈服して頭を下げたが、かなり鉄火だったしコマンドにかぶれつつあった事実もある。こちらの見こみの甘さを叱責されても仕方がない。
　だが、伝法ゆかりはどうだ？　あの女は現職の検事なのだ。検察部といえば現在は泡沫も泡沫、女子教育課よりもなお序列が低い存在にすぎないではないか。徹底した弾圧により組織は弱体し、一本残らず牙を抜かれて海猫のペットとして飼い殺しにされているはずだったのではないか。その腰抜けの検察部が跳ねっ返りの女子大生のたわ言を真に受けて、まともに動きだしてどうするのだ。まさに背中から銃弾を浴びせられた心境である。裏切りの罪は何倍も重い。
　それに加えて、伝法は女であり、そして美人ときている。女子教育課の面目は丸潰れといってもよかった。世間の失笑が聴こえ、伝法がマスコミでヒロインに祭り上

げられればあげられるほど、自分たちの権威が失墜していくのを認めないわけにはいかないのである。
　（ああ、今すぐにでもあの女をひっ捕らえ、ギュウギュウの目にあわせてやりたい。今まで培ってきた女子教育のノウハウをすべてあの女に対してそそぎこみ、完膚なきまでに懲らしめてやれたら、どんなにか胸がすくだろう――）
　二人とも胸に宿した復讐の感情は深く、大きかった。
　「君たちのとった行動について、非があるとは認めがたいね」
　静かな声で野辺地は言うのだった。彼は海猫のマリンブルーの制服を着ていた。山のような巨体がなおさら不気味に見える。部厚い胸に勲章がいくつも重なっている。
　「君たちは忠実に職務を執行したにすぎんよ」
　「しかし局長……」
　御坊が口を挟むのを野辺地はゆっくりと頷きながら遮った。
　「御坊課長の言いたいところはよくわかる。しかし今は信念が大切なのだ。わかるかね？　信念だよ、君」
　「はあ……」御坊は野辺地の真意を探るように彼を見つめる。
　「まさにそれこそが我々のような権力を強く執行していかねばならない立場の人間には欠かせない有りような

のだ」
　野辺地は立ち上がり、百九十センチを越える身長をむっくりと晒し、二人を睥睨するのである。彼は窓にかかるブラインドの遮光スライドを傾け、日差しを部屋のなかに入れた。眩しそうに目を細めながらビルのしたに広がるハイテク建築群とバラックが織りなす不思議なモザイク状態の街を眺めた。
　「もしそれを失う時がくれば、我々は自壊する。コマンドの銃撃も政治家の横やりも必要なく、黙っていても崩壊するのだ。そして東京は再び暗黒の犯罪都市となる」
　野辺地はブラインドを閉め、こちらを向いた。
　「だから君たちには是が非でも強い意志を持っていてもらわねばならない。どんなにマスコミがほざこうとも、欲のたけた、おっちょこちょいの女検事が騒ごうとも、微動だにしない鉄の心を維持しつづけてもらわねば困るのだ」
　「局長――」吉崎が初めて口を開いた。彼の瞳には今にもこぼれおちそうな涙があふれている。「すべて僕の責任なんです。僕にやらせてください。今から治安局の職を辞し、あの女を諜殺してまいりますっ」
　「おいおい、吉崎……」御坊は野辺地の表情を盗み見ながら吉崎の肩を叩いた。「お前、なに言ってんだ。こいつ、少し最近、疲れてまして」

　言い訳する御坊に頷き、野辺地は吉崎を真っすぐに見据える。
　「その忠誠心はじつに尊いものだと、私は評価するぞ。しかし短絡的な個人プレイはいかん。プランだったチームワークこそが、勝利を勝ちとり、目標を成就させる唯一最大の方法なのだ。あの女は身のほど知らずだがバカではない。なぜああしてマスコミを鼓舞し、我々を刺激するか、考えてみなければならないぞ。挑発し、偶発的な行動が起こるのを待っているのだ。そうすれば我々を攻撃する大義名分を手に入れることができる。マスコミといった犬連中ばかりではなく、政治家や国際世論まで味方に引きこむ策略すら念頭に入れておるのだろう。罠にかかってはいかん」
　野辺地に諭され、しおれる吉崎。うつむくと大粒の涙が頬を伝わった。
　「残念ながら、先手はあの女検事がとっている。仕方がない。まったく予期せぬ出来事だったんだからな。今しばらくは我々はこの状況に追随しなければならない。ま、踊りたいというのだから、踊らせてやればよい。美女の威勢のよい一人ダンスも一見に値するだろう。しかし、いずれは息切れする。あの女に補給路はないのだ。完全に孤軍奮闘、単騎突入だからな。焦りを誘い、勇み足を待つ。もし、ボロが出たら一気に攻め落とす。第二の伝法ゆかりが出現しないように徹底的に痛めつける」

　吉崎がパッと顔をあげた。
　「殺すんですね！」
　「それもいいが、君の怒りはその程度の小さいものなのかね」
　「はぁ……」
　「私のあの女に対する怒りと恨みはその程度で晴らせるものではないぞ」
　野辺地の目は異様に暗い輝きを放った。むくつけき怒り肩から、何かおぞましい感情のオーラが沸きだしてくる印象なのだ。陽炎のようにそれはユラユラと立ち昇っている。
　「死など、少しも苦しみではない。我々にはもっと効果的な方法がある。檻と鎖がな」
　なるほど、野辺地大洋は完全に本気になっているわけだ。御坊は心臓が縮み上がる、最近では珍しい恐怖感を覚えた。こんな怪物に狙われたら、どんな要職にある人間だってひとたまりもないだろう。女検事など風前の灯だ。さっきまで伝法ゆかりに抱いていた憎悪が、ふと同情に変わった。しかしそれも数秒で変質する。あの生意気な女が『檻』のなかで『鎖』につながれ、いったいどんな顔をするのか、御坊を支配するのは歪んだ嗜虐的な情欲ばかりである。

この章の残りは有料本編でお読みください。######せた。

攻防、そして急展開

『現代の妖怪』と題した伝法ゆかりのインタビュー記事が文芸雑誌の巻頭に掲載されたのはそれからまもなくのことである。
『妖怪』とはもちろん野辺地大洋をさしている。実名でそれは堂々、書かれていた。内容はしごく落ち着いたものであり、自制的なものだったが、野辺地に対して好意的なものではないし、今をときめくスター検事の肉声ということもあって、またたくまに世間の話題をさらった。
彼女が強調したのは野辺地の秘密主義への懐疑であり、顔の見えない活動に対する不信である。それが妖怪と呼ぶ理由であるのだが、言下に海猫の行なっている諜略や超法規的活動を批判しているのは明らかだった。
全編に感じられる印象といえば、伝法ゆかりの教養の高さとユーモアのセンスの良さである。シェークスピアの戯曲の台詞を引用したかと思えば、最近流行のアニメ漫画のヒーローの名もでてくる。インタビュアー――つまらない政治評論家だったが――の意地悪な突っこみに

も軽く応じ、けっして慌てない。
　伝法の個性と性格が強調されればされるほど、彼女の発言は信憑性を帯びてくるのと同時に、いっそう海猫の暗さが、野辺地大洋の妖怪ぶりが浮き彫りになってくる、そうした高等戦術を感じさせるインタビューと言えるだろう。
　彼女は最後に野辺地へ呼び掛けている。
　『……もちろん私の意見ばかりがジャーナリズム、マスコミに流れるのはアンフェアでありましょう。それでは私にとっても得るところがない。これはあくまでキャッチボールの投球と考えていただきたい。返球をお待ちしております。社会の進歩と文化の成熟はまさにそこから始まるのでしょうから……』
　伝法の打った作戦はきわどい所をついているわけだ。もともと海猫の実態は秘密警察なのだから、日のあたる場所へ出てこられるわけもない。しかし世間に伝えられている彼らは単なる一行政機関であり、他の省庁と変わらないわけで、こうまで明白に呼び掛けられて無視するのはおかしな理屈になる。
　とは言うものの、現在の世間の風評は『伝法＝善玉』『海猫＝悪玉』で凝り固まっており、ノコノコ顔をだすならば、舌鋒鋭く、弁舌爽やかな、いかにも見栄えのいい美人検事の勝利は明らかだろう。いずれにせよ、野辺地大洋の権威に泥が塗られたのは間違いのないところだ

った。はたしてこの難しいボールを『現代の妖怪』がどう打ち返してくるか、大衆は固唾を呑んで見守った。
　ある意味において、まったく海猫らしい返球が伝法の胸もとに飛んできたのである。
　検察部からの帰宅途中――この事件の担当になって以来、彼女には送迎の特別車があてがわれていた。防弾ガラスが張りめぐらされている物々しい車である――彼女は夜間のスーパーに立ち寄った。雨がしとしと降っていたので、彼女は黒いレインコートを着、傘をさして、スーパーの入り口へ向かった。
　大きな黒い影が彼女の背後に迫った。
　伝法はハッとして、ふりかえった。ラクビー選手並みの巨漢がこちらへ突進してくる。すべて黒づくめの服装。頭からこれも黒の目だし帽。雨に濡れてキラキラと雫が光っている。コンクリートにできた水溜まりを蹴散らしながら、男は猛然と伝法に迫ってくる。胸の前で両手で握り締めているのは拳銃だった。どうみてもまがい物ではない。
　「天誅！」
　男は叫びつつ、射程距離に入り、両手を突き出した。冷たい銃口が彼女の胸に狙いをつけた。伝法は悲鳴をあげながら、とっさにかざしていた傘を男に投げつけた。
　同時に銃声。
　傘は跳ね上がり、骨組みがグニャグニャに折れ曲っ

た。地面にそれが落ちた時、男の眼前には伝法の姿はなかった。彼女は傘を投げつけた途端に、右へ飛んで、間一髪、被弾を免れたのだ。彼女の身体は転がり、そのままコートの裾を翻して立ち上がると、駐車場に向かって走りだした。男は後を追い、再び接近すると、引き金を二度ひいた。乾いた音が轟き、硝煙と火花が暗闇を照らした。

　前を走っていた伝法の身体が大きくのけぞった。濡れた黒髪が舞った。そのまま膝から崩れ落ち、うつぶせに倒れた。

　身動きしない彼女にトドメを刺すべく、男は駆けより、傍らまでくる。コートの背中に真っ黒い穴が開いている。ふと、男は意外な事実を発見する。血が、血痕が見当らないのだ。ギョッとする男の目にさらに信じられない光景が展開する。倒れていた伝法検事はとても怪我をしているとは思えないスピードで振り向いた。と同時に長い足がえいとばかりに振りあげられた。ハイヒールの尖った爪先が男の股間を直撃する。男の目には漆黒のアスファルトをバックに眩しいくらいに白い、太腿までの伝法の足が焼きつけられた。二度目のキックはなお振りあがり、太腿のつけ根のパンティ――ブルーだった――まで露呈させながら、男の手の拳銃を叩き落とした。重大な、まさしくとり返しのつかない過失の恐怖感に男は金的蹴りの苦痛も忘れている。

　伝法の送迎車の運転手がやっと男にタックルをかけた。二人はアスファルトのうえに倒れ、水飛沫をあげながら、しばし格闘を繰り広げたが、金的蹴りのダメージは犯人の動きを緩慢にした。わずかずつ形勢に差がつきはじめ、とうとう男は背中をとられ、腕をねじあげられた。その手首へ銀色の手錠がはめられた。
　「大丈夫ですか、検事？」
　「ええ、ちょっと擦り剥いただけよ……」
　伝法は足を引きずりながら立ち上がり、二人の所までくる。
　男は腕をねじあげられて呻き声をあげ、強引に起き上がらされた。目だし帽がずれている。目の穴が耳のところまできていた。
　「これじゃ見えないでしょう」
　伝法は帽子の裾に指をかけ、一気に剥ぎとった。伝法はその顔に懐中電灯を照らした。そして口笛を吹くのである。

　この章の残りは有料本編でお読みください。

　　檻の中の実態

　伝法はこの『見学』で収容所の実態がつまびらかになる、などという期待はもとより抱いていない。不意をつく緊急的な査察とは違い、前もって相手が知っており、お膳立ても彼らがしているのだから、田沼も言ったようにこれは突破口にすぎず、次へのステップにするためのいわば通過儀礼である。しかしそうは言っても注意深く観察すれば何かが理解できるかもしれない。この職業で養ってきた観察眼をフルに発揮するのだ。
　エレベーターには野辺地、栃野、伝法、そして警備兵が乗った。
　三階で降りる。
　すぐ正面に鋼鉄製の扉があった。栃野がブザーを押した。覗き窓が開き、かすかに人間の瞳が動く。電子音がして、扉が開いた。これまでの警備兵とは違う種類の制服部員が二人、廊下の両側に立っている。よく見ると、それは女性であり化粧もしている。身体は鍛えられて女子レスラーを彷彿とさせた。
　ここからは綾部と名乗る女性の海猫が加わった。更正区域の管理部長なのだという。綾部は野辺地と栃野には最敬礼をしたが、伝法には冷ややかな視線とほんの少しの会釈をよこしただけだった。
　「用意はできているかね。管理部長？」
　「はい、体力室と思想室を使用することにしました。

更正区域の概要を理解して戴くには、あそこでの訓練が最も適切かと思います」
　「よろしい。日頃の鍛練の成果、ゲストばかりか、この野辺地も期待しておるぞ」
　伝法は眉をあげてヤレヤレの表情。
　（体育会系なんだな、結局）そういうノリをしている。野辺地もこの綾部という女も。
　その綾部は露骨に伝法へ敵意を剥きだしている。緊急招集をかけられたのだろうから仕方のないところではあるけれども、大人なんだから、もう少し自分を押さえてほしいものだ。
　伝法は彼女の後に従っていたが、通路の奥まったところに『謹慎室』のプレートのかかった部屋があるのを発見した。
　「謹慎室……」
　伝法がつぶやくと綾部が足を止めた。「何か？」
　「あそこをちょっと見せてもらえませんか？」
　「たいしたものではありません。ただの六畳間です。規則を破った収容者を反省させるための部屋です。別に拷問具などはありませんから」
　「それではかまわないでしょう――」
　伝法はツカツカとその部屋に近づいていく。綾部が驚いて後を追った。
　扉の上部に曇りガラスの窓があり、中の照明が消され

ている。しかし――、伝法の耳にかすかだが、呻き声が聴こえてきた。女のものだ。何かに塞がれているようなくぐもった声である。
「おかしいわ。誰かいるみたい」
伝法は扉のノブをつかんだ。しかしロックされていた。
「勝手な真似はやめてくださいっ」
綾部の厳しい声。そして彼女の男のようなゴツゴツした手が伝法の腕をとって引いた。
「でも声が聴こえましたよ」
「気のせいでしょう」と綾部は言ったが、再び中から苦しげな声が漏れてきた。
「管理部長、説明してみたまえ」野辺地が促す。
「……は、じつは一名、昂奮した収容者がおりまして、落ち着かせるためにこの中に入れておるのです」
「暴れたのですか？」綾部が黙っていると、伝法はたたみかけるように、「どうやら猿轡をされているようですが、そこまでする必要があるんですか」
「局長――」綾部は伝法を無視して野辺地に向かって言う。「だから部外者の立ち入りは嫌だと申したのです。収容者をイタズラに興奮させるだけですから。せっかくの教育が、これでは台無しになってしまいますわ」
「わかってるよ、管理部長。しかしこれは仕方のない方便なのだ。こうするのが収容所の独立と機能を守る最

良の方法なんだから。伝法検事も無理にとは言っていない。ねえ、そうでしょう？」
　伝法は無言のまま頷いた。いずれにせよ、彼らが駄目と頑張れば見られない。あまり色気をだすのは得策ではないだろう。まだ他にも観察する場所はあるはずだ。伝法は何事か訴えかけてくるような呻き声に心を残しつつ、野辺地に招かれるままにその場を離れた。
　『思想室』の札が下がった部屋の扉を開けると、異様な光景があった。二十畳程度の広さの板の間に十数人の女たちがクローンのように正座して黙想していたのだ。彼女たちはみな鼠色の収容衣を着せられていた。画一化された印象は衣服ばかりでなく髪型もまた影響している。一様にそれは二本の三つ網に束ねられ、両脇へ垂らしている……。
　よく見ると、ほとんどはまだあどけなさの残る未成年者たちであったが、中には顔つきも体つきも大人の女を思わせる者も混じっていた。その年齢ではお下げ髪が似合うとは思われなかったし、どこか滑稽な印象を与えているのだが、おかまいなく画一化を強制されているのが不気味である。中にはショートヘアの髪型もいたが、それはそれで強引に頭の中心からふたつに分けてちょんまげののような団子を作っている。
　彼女たちは来訪者の入場を悟ったはずであるが、目を開こうとせず、眉ひとつ動かさず、自分の呼吸の音だけ

聴くのに集中しているといった感じであった。
「……どういうことですの……」伝法は異様さに圧倒されて小さな声で訊ねた。
「精神の鍛練がここでの日課の中心なのです」と綾部。「罪を犯した自分の弱い心と決別し、何にも動じない鉄の意志を築きあげる。それが更正区域における目的です。まあ、監房区域を含めたこの収容所の一貫したポリシーでもありますが。言うまでもなく女の身体は男よりもはかなく脆いものです。どのような強化を講じても限界がある。脆い肉体は怠惰と放漫と無知を導きがちであり、克服はひとえに心の鍛練があるばかりなのです」
「……」どこか胡散臭い男尊女卑思想だ。しかし反論は控えよう。
「強い意志とは何か――」喋っているうちに気分が高揚してきたのか、綾部の顔は火照り気味。「それはもちろん反抗的な、自己の意見に固執する、秩序を乱すような意志ではない。優しさがあり、辛抱強く、従順的で、和を尊重する心こそが、真の強い意志と呼ばれるべきものなのです」
「そういう女を生産するための工場なのですね、ここは」
皮肉に聞こえたらしく、綾部はむっとして伝法を睨みつける。彼女は言葉を呑みこみ、正座している女たちの最前列にいた、ある女の前へ歩み寄った。

「この娘はいまでこそここでの――つまり更正区域での――生活を許されていますが、かなり活発なコマンドの運動をしていた大学生だったのですよ」
　と、綾部はその娘のあごに手をかけ、顔を引き起こした。そうされても、娘は美しい睫毛をピタリと閉じたまま、瞑想をつづけている。線の細い顔立ちで、若々しい薔薇色の頬と、繊細な朱唇が印象的だ。女闘士の印象はなく、市役所や税務署といったところの啓発ポスターに使われるモデル、そんな癖のない美貌である。

　この章の残りは有料本編でお読みください。

　　捕獲成功

「検事のご質問は聞かずとも想像できます――」と、野辺地はあごを撫でながら言った。伝法をジロリと一瞥し、そして隣の部屋の惨状に視線を移動させる。「ま、抗議と言ったほうがいいのかもしれませんがね」
　「とくに伝法検事は女性でいらっしゃるから、なおさらご懸念が大きいのではないでしょうか」
　新谷がつづけた。

「しかし女性といっても検事は第一線で活躍しておられるわけだから、きっと冷静に問題の核心部分を理解して戴けると思いますよ」
これは栃野である。
脅迫だろうか？　と伝法は思った。取引のためのプレッシャーか。そうであるなら、とりあえず命の危険はないことになるのだが……。とにかく三人の間をキャッチボールされているみたいで、自分の立場の軽さ脆さを痛感しないわけにはいかない。
伝法はもとより、慣れているはずの男たちも振り返るほどの絶叫が聴こえてきた。椅子の肘掛部分に拘束されている腕に、女は革ベルトを引き千切らんばかりの強靭な力をこめている。十本の指のすべてが突き立てられる。肘掛の材質がもしもっと堅いものであったら――実際はレザー張りだったが――彼女の指の爪の間から鮮血が迸しっただろうと容易に想像できるほどの握力だった。力が入っているのは細腕と白魚のような指ばかりではない。湯を頭からかぶったような汗だらけの美貌にもまた信じられないほどの力がたまっている。こめかみの血管がみるみる浮きあがり、歯茎の肉に沈みこむほど、歯を食い縛り、唇をぶるぶる震わせ、頬がふくらみ、小鼻が開いた。体内を駆け回る強力な電流に耐えようと必死の努力をつづけているのだ。
しかしそのどれもが強靭な拘束具に吸収されていき、

やがて力尽きる。機械力のエネルギーは生身の身体にとって無尽蔵であり、圧倒的だった。美しい肉体から美を奪い取り、崇高な精神から気力を摘出し、女性を肉の塊におとしめるのである。
　とうとう彼女は口から泡を噴出させはじめ、眼球が裏返って白目になった。意識は喪失したと思われたが、電流は人形と化した彼女のボディをなおも灼き、痙攣させつづけている。
　「……駄目よ……やめて……死んじゃうわ！」
　伝法は我を忘れて叫び、立ちあがろうとする。野辺地が強い力で彼女の腕をつかみ座らせた。

　この章の残りは有料本編でお読みください。

矯正官との対面

　自分が気絶している体たらくを、叱り飛ばしている別の自分がいた。
　『早く起きろ、伝法ゆかり。何をスヤスヤ寝ている。そんな場合ではないぞ。お前を取り巻いている状況は刻一刻、悪化しているのだ。一秒でも逸すれば、取り返し

がつかなくなる。さあ、早く目をさますんだ』
　一方では猫なで声も聞こえた。
　『いいのよ。そのまま寝ていなさい。起きては駄目。今のままが一番いい。それにお前は働き詰めで、このくらい寝坊していても誰からも文句を言われる筋合いじゃない。そうでしょう。お前は頑張った。もうじゅうぶんよ。ずっとずっと寝ていなさい。決して目を開けては駄目。開けてしまえばそこには……』
　苦しめる二人の自分に伝法は夢のなかで呻きをあげた。それははっきりと耳に聞こえた。伝法は腫れぼったい瞼をゆっくりと開けた。ぼやけていた天井が鮮明になるにつれ、いつもの自分の部屋の天井の模様と違うのにようやく気がついた。
　（どこよ？　ここは……）
　瞬きをひとつすると、すべての記憶が蘇ってきた。跳ねるように起きあがろうとしたが、首に痛みを覚え、そして何か非常に強い力が肩を押さえつけた。同時にまったく見慣れない顔が覗きこんできた。
　「大丈夫か、おめぇ」
　顔は訛りのある言葉を発した。顔がふたつに増えた。
　「気がついたらしいな」
　その顔にも見覚えがない。
　「……みんなはどこ？」
　伝法はふたつの顔を交互に見ながら語りかけた。

「喋らんほうがいいぞ。まだ顔が青い」
　急に心配になってくる。辺りの様子をうかがうと、ここはまだ例のモグラ房のなかなのだ。野辺地や新谷はどうしたのか。そしてこの男たちはいったい何者なのか……。
　彼らは薄いブルーのジャージを着ていた。色は海猫のシンボルカラーだから、彼らもまたここの職員なのだろう。頭髪は二人とも角刈りである。訛りのあるほうが年長者で六十代くらい。もう一人はまだ若く、二十代前半ではないかと思われる。彼らは仰向けに横たわっている伝法の両側に胡坐を掻いて座り、それぞれタバコを指に挟んでいた。
　（タバコ？）伝法は鼻腔にザラザラする不快な違和感を覚えながら懸念した。すると、彼らは治療班でもないらしい。患者の傍らでプカプカ喫煙している医療関係者はいないだろう。
　「あなたたちは誰なの？　収容所の人？」
　伝法が訊ねると、年長者のほうがアルミのチビた灰皿にタバコを押し潰しながらいった。
　「ああ、そうだ。ここの職員だ。俺が小野寺徳蔵、そっちが青田仁。二人とも矯正官だな」
　「矯正官？」伝法はすぐにＸ２号室やＸ３号室で哀れな女囚たちの脇に添い寝しながら高鼾をかいていた巨根の持ち主の男どもを思いだす。たしかに小野寺徳蔵も青

田仁も身体は熊のように大きい。そう言えば髪型もみんな角刈りだった。
　その矯正官がなぜここにいるのだろう。なぜ私をじっと見つめているのか。
　「こっちが名乗ったんだから、おめぇも自己紹介くらいしたらどうだ？　礼儀ってもんだろう。これから長いつき合いになるんだし」
　「……長いつき合いって？」
　伝法は弾かれるように起きあがった。今度は二人とも手を出さない。
　上体を起こすと、まだ頭がくらめいた。胸がムカムカして吐き気がする。首へのあの衝撃はやはり暴力行為だったのか……。
　「言わんこっちゃない。ほら、しっかりしろ」
　小野寺は伝法のセーターの背中に手を当て、よしよしとばかりに撫でさすった。その感触にゾクッとして背筋をのばし、彼の手を避ける。
　「遠慮すんなって。めんこい顔がまだ真っ青だっちゅうに。乳のバンド、外したほうが楽なんじゃないか」
　小野寺はセーター越しにブラジャーのホックを探り当てると、それをつまんできた。
　「――？」伝法は男の行為が信じられず、彼の顔を凝視する。
　小野寺はニタニタ笑っている。並びのデコボコした歯

が黄色い。
　「おめぇ、デカパイなのに小さい乳バンドしてんだろ。だから苦しいんだぜ」
　「馬鹿な――やめて、手を放しなさいっ」
　抗っている最中に伝法は自分の足からソックスが脱がされているの見た。白い素足とピンク色の踵、小粒の爪、それらが激しく色褪せた、汗臭い古畳のうえを踊りまわる。伝法はようやく小野寺の手を振り払い、二人の男の間から這いだして、向きを変え対峙する。男たちの背後にこの部屋のただひとつの扉がある。重々しい鋼鉄製のそれは伝法を沈黙させるかのように、冷たく無表情である。
　小野寺は灰皿に捨てたはずの吸い殻をつまんで口に咥えた。横から青田が百円ライターを差しだし、火をつける。いとしげに残り少ない煙を吸いこみ、まるい鼻の穴から吹きだす。目を細め、荒い息遣いでこちらを睨みつけている伝法をネメつける。
　「おめぇ、めんこい顔をしてるのに、検事なんだってな。日本もたいした国になったもんだぜ。検事さんにまで、こんな別嬪がこぼれてくるようになったんだから、層が厚くなったんだろうなあ」
　「徳さん、のんきなこと言ってないで、そろそろやりましょうよ。こういう女を躾るのは最初が肝心なんだって、徳さん、いつもそう教えてくれてるじゃないです

か」
　青田仁が舌なめずりするように言った。
　「仁、お前、そうガツガツすんじゃねえよ。俺はいま、感慨に耽っているとこなんだからよ。その昔、俺がおめぇくらいの歳の頃には、女弁護士だ、女検事だ、といやぁそりゃあもうどうしようもないドブスばかりでよ。男か女か、素っ裸にひん剥いてみねぇとわからんほど、凄かったんだぞ。ったく、いい時代になったもんだぜ。テレビドラマにしかいなかったような、美人検事がこうして目の前にいるんだからよぉ」
　徳さんは己れの下唇の皮を爪でこそぎながら、伝法を眺めまわしている。
　「……あなたたち、何か誤解しているようね。私は今日、ここへ野辺地局長立ち会いの下に、視察にきた東京第二検察部の人間よ。伝法ゆかり検事と言います。アクシデントがあって気分を悪くしたけれど、もう大丈夫。これから大事な会議があるからすぐに検察部へ戻らなければいけないの。協力して頂戴」
　「肌が綺麗だから黒のセーターが本当によく似合ってるぜ」
　伝法の怒りを抑えた説明も徳さんはちっとも聞いていなかったらしい。
　「顔だけじゃなくて、身体も相当なもんってとこがトドメだよな。スタイル抜群の美人検事か、いやはや、じ

つにどうも、目のやり場に困るわな」
　徳さんはとうとうフィルターのみになってしまったタバコを未練がましくもう一吸いしたのち、灰皿に押しつけた。そのうえへ茶碗の底に残っていた出がらしを丁寧にかけて、十二分に火の粉を消滅させると、ジャージのズボンの膝をパシンを勢いよく叩いて立ちあがった。
　「さ、収容者も名乗ったんだし、そろそろおっぱじめるか」
　「そうこなくっちゃ！」
　仁は跳ねるようにしてその場で飛び、仁王立ちした。猿のような身軽さである。そしてジャージの上着のファスナーを引き下げて外すと、さっと脱ぎ去ってしまった。ランニングシャツ一枚の上半身は筋肉の束の塊だった。まるでペニスのように腕も胸板も昂奮に紅潮し隆起し血管を浮きあがらせている。

　以下は有料本編でお読みください。
######